

暁
の
大
地
6

成
尾
陽

目次

九、人生の目的 ◆ 7

愛善の心 ◆ 7

変わりゆく世の中 ◆ 17

子育て ◆ 26

自然破壊のツケ ◆ 36

皆神山 ◆ 46

石の宮 ◆ 56

ワクチン ◆ 65

梅干しとラッキョウ ◆ 75

宣霊合祀 ◆ 84

黒木鳥居と御杖代 ◆ 94

受けた恩 ◆ 103

ありがたく働く ◆ 113

一所懸命 ◇ 122

丑から寅へ ◇ 132

節分の伝統 ◇ 142

多米津物と感謝の心 ◇ 152

真心からの供え物 ◇ 161

絶大なご守護 ◇ 170

出修の神事 ◇ 180

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年と二十三年の機関誌「おほもと」と、平成二十四年以降の機関誌「みろくのよ」に連載したもので、登場人物の多くは実在の人物ではありません。

暁
の
大
地
6

九、人生の目的

愛善の心

「おめでとうございます」

大地は実家の玄関のドアを開け、声を掛けた。

「いらつしやうい」

奥から明るい声がし、京子が小走りに現れた。

「ソウ君、よく来たね、おめでとう。寒かったでしょ」

大地の手をしっかりと握って、恥ずかしそうにはにかんでいるのは、二歳になった大地の長男・蒼汰朗、つまり京子の孫である。

「お母さん、あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます、芳さん。また降ってきたみたいね。さあ、上がって」

「はい、おじゃまします。少し積もりそうですね。蒼汰朗、長靴を脱いで」

芳の声で蒼汰朗は玄関に腰掛けて上手に長靴を脱ぎ、腹ばいになって靴を直した。

「お、たいしたものだ。偉いな蒼汰朗は」

遅れて出てきた大地の父・剛が、孫の頭をなでた。

「お父さん、おめでとうございます」

芳が笑顔であいさつした。

芳は雨宮家に嫁いで四回目の正月を迎えていた。大地と結婚したのが平成二十九年六月、一年後に蒼汰朗を授かった。令和三年の新年で二歳半になった蒼汰朗は、目がクリッとした端正な顔立ちで、ようやく片言の単語で会話らしいことができるようになりつつあった。かわいい盛りである。

「はい、おめでとうございます。それにしても芳さんの躰しづみがいいんだな、この年で靴をそろえられるとはね」

「いえ、気まぐれで、いつもできるわけじゃないんですよ」

芳がうれしそうに言うと、蒼汰朗は立ち上がって京子の手をつかみ、催促するように奥へ向かって行った。

今年の正月は、雨宮家全員で顔をそろえることができず、新型コロナウイルスの影

響がここにも及んでいた。

師走に入り、第三波の感染拡大が広がり、東京で美容師として働く大地の妹・ちあきも両親を気遣い、長野への帰省を断念した。

“早く会いたいけん、今は帰らんでいいけんね”

帰省を迷っていたちあきは、このフレーズをテレビニュースで知り、温かみのある表現に共感し、正月休みは東京に残ることにしたのだった。

この言葉は、島根県の広聴広報課がゴールデンウィークに向け企画し、昨年四月末に山陰中央新報に掲載した新聞広告で、「第四十回新聞広告賞」に選ばれた出雲弁のコピーである。そこには“県外に住むあなたが大切だと想うひとに、どうかそんな言葉をかけて欲しい。そのひとを守るために今は会わないことにしませんか。…近いうちに、いつも通り会える日が必ず来ます”とメッセージが添えられていた。

…なるほどなあ、と思ったちあきは、父の「心配ない、大丈夫だから帰ってこいよ」とのLINEメッセージに、“高齢者二人のためだからね”と返信していた。

「高齢者って七十歳以上じゃないのか？俺はまだそんな年じゃないぞ」

剛は、ちあきが帰省しない理由を大地に愚痴った。

「まあ、お父さんも去年還暦で会社を定年になったし、もう孫もいるおじいさんだから、そろそろあらがわないようにした方がいいかもね」

大地が言った。

「こんなかわいい孫がいるんだから、そうなんだろうけど、なんだかな」

「お父さんは認めたくないもんね。私はまだ還暦まで数年あるから、当然高齢者じゃないわよ。でも、蒼汰朗に“バアバ”って呼ばれるとうれしいけどね」

京子が笑いながら言った。

「まあまあ、新年早々、年の話ばかりじゃつまらないから…。さあ、乾杯しよう」
剛が話を変えた。

「では、あらためて。新年、あけましておめでとうございます」

剛の発声に、それぞれが「おめでとうございます」と唱和した。

「おめでと…」

蒼汰朗のはにかんだ声も聞こえ、笑いが起こった。

「すごい、おめでとぅ…って言えるんだ」

大地の弟・司が驚いた様子で言った。

幼子が一人いるだけで、その場の雰囲気が大きく変わる。まさに天使のような存在である。「主役」の蒼汰朗を中心に、兩宮家の居間はにぎやかな新年会となった。

両親と弟、妻と長男。妹がこの席にいないのは残念だが、大地は家族六人が元気で新年を迎えられたことを、心からありがたいと感じ、おのずと笑顔になった。

「綾部のおじいちゃんとおばあちゃんも元気だったよ」

大地は今朝、祖父母の梅木松太郎とともに電話をし、新年のあいさつを交わしたことを報告した。

「あら、そう。私、まだ連絡してないわ。またあとで電話しないとね。」

「そういえば芳さん、亀岡の天恩郷は、麒麟きりんがくる」の大河効果で、参観者が増えているそうね」

「そうらしいですね。うちの両親も先月お参りに行ったようですが、ちょうど日曜日で、大勢の人でにぎわっていて、びっくりしていました」

芳が自身の実家を通しての情報を伝えた。

「コロナの影響で、放送が一時中断したけど、今回の大河ドラマはなかなか面白いな」
剛が言った。

「その分、期間も延長するらしいね。確か二月七日まで延びるそうだよ。大河ドラマは放送が終了してからも、『大河ロス』とか言って、しばらくゆかりの地は観光客でにぎわうらしいね。だから、本能寺の変の起点になった亀山城址じょうしの大本は、これから春にかけて人が多くなるんじゃないかな」

大地は、光秀時代の石垣の一部が残る天恩郷の神苑風景を思い浮かべていた。

「反逆者、謀反人と言われ続けた明智光秀が、今回は英雄のように描かれているのが斬新だね。十一月ごろの放送だったか、比叡山焼き討ちの前後、特に天台座主ざすの寛恕かんじょの悪役ぶりが秀逸だったな。それに今回の大河は、信長や正親町天皇おごぎまち、摂津晴門せつつはるかどや松永久秀、最初のころだったら斎藤道三とか、脇役がそうそうたる顔ぶれで、見応えがあるよね」

「司は、やけに詳しいな」

大地が感心した。

「それにしても、天台座主ざすや僧侶をあんなふうに悪役で描かれたら、延暦寺の人たちは嫌だろうね。私、ちよつと心配しちゃうわ」

「そうだよね」

大地も同調した。

「俺も思ったな。ひよっとしたら、比叡山がNHKに抗議を入れるんじゃないかと心配になったね」

剛が相槌を打った。

「それが違うんだよ。何かの記事で読んだんだけど、天台宗の役員の人のコメントが紹介されていてね。正確には憶えていないけど、大河ドラマの比叡山焼き討ちの描写に関しては、あくまでもドラマなので、比叡山としては“怨親平等”の思想から、いちいちコメントはしませんと書いてあったんだよね」

大地が説明した。

「おんしんびようどう?」

司が訊いた。

「怨親平等っていうのは、恨み敵対した者も、親しい味方も、分け隔てなく同じように扱うってことらしいね」

「なるほど、中東紛争のように、報復の連鎖はしないということか」

「それに比叡山延暦寺では毎年、信長による焼き討ちの犠牲者を供養する法要を行っ

ていて、その法要の鎮魂塚には信長の遺品も納めてあつて、敵味方同じように追悼しているそうだよ」

「さすが天台宗だ、懐が深いな」

剛がうなずきながら言つた。

「もう一つ、感心したことがあつてね」

大地は真面目な顔になつた。

「毎年、延暦寺のお坊さんたちが托鉢たくはつをするでしょ」

「ああ、寒行托鉢たくはつだな」

「そうそれ、年末にお坊さんたちが比叡山から町へ下りて、寒い中を托鉢たくはつに歩いて、お布施を集めるんだよね。でね、去年はその浄財の一部を、NHKの歳末たすけあい

に寄付したそうだよ」

「えつ、NHKに…。やるね」

剛の声が大きくなつた。

「でも、大本にも同じような考え方がありますよね、お母さん」

芳が京子に言つた。

「えつ、そう、そうね、あつたよね」

「確か、讃美歌の中にあつたな」

大地が助け舟を出した。

「責めらるる苦しき身にも虐ぐる

仇を愛する心たまはれ

怨親平等おんしんびようどう

「あだ 仇を愛する心か…、なかなかできることじゃないけどな」

剛が腕を組んだ。

すると京子も思い出したように短歌を口ずさんだ。

「そういえば、

睨まれてにらみかへすは人ごころ

笑ふてかへすは神心なる

という聖師さまのお歌もあつたわ」

「そのお歌、ステキですよね」

「でも、自分がそんなふうに見えるかどうかは別だけどね」

京子は芳と目を合わせてから、剛の方に目をやった。

剛は、笑って返されたらかえって怖いぞお……と言わんばかりに、肩をすくめた。

「見直し聞き直し……、大本も天台宗も、要は『愛善の心』だよ。お正月だし、めでたし、めでたし……、としようね」

「フツ、お兄ちゃん、うまくまとめたね」

司がちゃかすように言った。

変わりゆく世の中

「そろそろ時間かな」

そう言って司がリビングを出て行き、程なくパソコンを持って戻ってきた。そのままテレビの前で何やら操作して、パソコンを設置した。

「では、今からオンライン新年会を始めます」

「おつ、ちあきが参加するのかな？」

大地が訊いた。

「そうそう。今、Zoomで招待しているから、しばらく待つて」

「それにしても、去年のコロナ禍から急速にネットを使うことが増えたよな。司もリモートワークが増えたって？」

「そうなんだよ。うちの銀行でも出勤は二日に一回のペースになってきて、働き方も一変したね」

司は大学卒業後、長野市内の地方銀行に勤務。営業担当で、お客さまとの接し方に、苦慮しているという。

「リモートワークもいろいろ制約があるし、お客さんも年配の人が多いから、ネット

だけに頼るわけにもいかず、何かと難しいね」

「司はいろいろ大変みたいね。でも、私は良いこともあったわよ。おかげで聖地での大祭や月次祭がライブ中継されて、自宅からお参りできるようになったしね。ありがたいわよ」

京子がうれしそうに言った。

「そうですよね、お母さん。ネットを通じてお参りできるようになるなんて、一年前までは考えてもいませんでした。土曜の夜の『新型コロナウイルス終息オンライン一斉祈願』も、全国の人たちと一緒にお参りできるようになりましたね」

「そうですね。私もスマホを通してご祈願させていただいているけど、あの一斉祈願には、何人くらい参加しているのかしらね？」

「年末に本部の知り合いに聞いたんですが、大体毎回、百アカウント前後らしいですね。でも昨年の最後、直心会が担当の時には、三百くらいになったそうですよ」

「え、さすが直心会だわ」

「お母さんも、ユーチューブやSNSができるようになったんだね？」

大地が訊いた。

「まあ、何とかお父さんに教えてもらいながらね。お父さんが、ユーチューブの大本公式チャンネルに登録してくれたしね」

「えっ、そうなの？」

大地が驚いたように言った。

「そんなに驚くことでもないだろう。まあ、成り行きでね」

京子の夫・剛は、大本信徒ではないものの、大本については理解を示していて、何かと京子に協力してくれている。

「チャンネル登録者も増えているよな。確か暮れには二万を超えていたんじゃないかな」

剛が言った。

「そうだよ。もう二万一千になっていたね。そのほとんど、二万人くらいが一般の人らしいよ」

「ほー、そりゃすごいな。たいしたもんだ。確かにコンテンツの数もそこそこあるし、中身の質は高いと思うな」

「そうですよね。特に聖師さま・出口王仁三郎のネームバリューは高いので、関連動

画から大本の映像を見にくる人が多いんですって。それと霊界、目に見えない世界のことについて知りたい人が増えているような感じですね」

^{かわる}
芳が答えた。

「こういう先の見えない時代だから、死後の世界に興味を持つ人が増えているんだろうな」

「そうだね。霊界を紹介した『この世の向こうに』というアニメは、一年前まではアクセス数一万くらいだったのに、コロナ禍で一気に増えて、もう八十二万回を超えているもんね」

大地は登録者数の急増に驚いていた。

「パソコンとかに疎い私の両親ですら、最近はタブレットを使い始めて、ユーチューブの動画を見るようになったんですから、時代は進みましたね。それとLINEのビデオ通話で蒼汰朗の様子が見られるのが楽しみのようです。必要に迫られると、人間、できるものですね」

芳もネットを通じて両親に孫の姿を送れることがうれしく、こんな世の中にあつて、新しい手段を使い、環境に順応できることも神さまのお恵みだと感じていた。

「大本讃美歌の中のお歌に、今の私の心境にぴったりだなと思ったのがあったんですよ。」

変はりゆく世に生まれ来て皇神の

恵みにひたるは嬉しからずや

（大本讃美歌第一〇二）

というお歌なんです」

「本当に今は、変わりゆく世の中だね。でも、芳さんのように何事もプラスに捉えていけないとね」

「はい」

芳は京子に共感してもらい、うれしそうに返事した。

「おつ、お姉ちゃんが入ってきた」

司がパソコンを操作した。

「あけましておめでとうございます」

テレビ画面の向こうのちあきが笑顔であいさつした。

「おめでとうございます」

雨宮家の全員が、声を合わせるように応えた。

「みんな元気？ あ、芳さんお久しぶりです」

「お久しぶりです。ちあきちゃんも元気？」

「はい、めっちゃめちゃ元気。年末が忙しかったんで、今朝はゆっくり寝てました」

「お客さん、多かったですか？」

「コロナがはやりだしたころは、足が遠のいたけどね。でも、みんな髪は伸びるから、徐々に戻ってきたの。それに多くの常連さんは来てくださったんで、ありがたかったわ」

「そりゃ、良かったな」

剛が安心したように言った。

「ホント、美容室ってお客さんと密になるし、仕事が減るのかと心配していたからね。良かった、良かった」

京子もテレビ画面のちあきに向かって言った。

「確かにそうよね。寒い間はコロナも減りそうにないから、あつたかくなったら帰ってらっしゃいね。みんなちあきにカットしてもらおうのを待っているから」

「そうだね、春になったら一度帰れるかな」

ネットを使つての画面越しでのやり取りだが、互いがそばにいるかのように、スムー

ズに会話ができる。しかもほとんど費用はかからない。便利な世の中になったものである。

蒼汰朗そうたろうが興味深げにテレビに向かって歩み寄った。

「あつ、ソウタロウ」

ちあきが手を振った。

「ほら、ちあきおばちゃんだよ」

「違う、チーねえちゃんだからね」

ちあきが、大地の呼び掛けに反論した。

「蒼汰朗、ほら」

芳が何かしゃべるように蒼汰朗に耳打ちすると、蒼汰朗は恥ずかしそうに小さな声で、おめでとう…と言った。

「うわ、すごい、もうしゃべれるんだ、おめでとうソウ君。アツ、そのトーマス気に入ったかな？」

ちあきがクリスマスプレゼントで贈ったおもちゃの機関車を、蒼汰朗はしっかりと握りしめていた。

「すつごく気に入ったみたいで、毎日これで遊んでるのよ」

「ほんと、良かった。ありがとうね、ソウ君」

画面のちあきを含め、兩宮家全員での新年会はにぎやかに進み、話に花が咲いた。

「そうだ、大地たちも人型を書いておいてね」

「了解、また書いて持ってくるね」

大地が言った。

「お母さん、私の分は書いておいてね」

ちあきが画面から話し掛けてきた。

「あと、アパートと自転車もお願い。いつもなら人型に書いてから体を撫でるんだけど、今年は無理だね」

「その分、お母さんが真心込めてしつかり書かせてもらうからね」

「お願いします」

二人の会話を聞いた芳が、あの…と京子に訊いた。

「人型で体を撫でるんですか？」

「いえ、別に撫でなくともいいんだけどね。今回のちあきのように代筆でもいいわ

けだから、必ずそうしなさいということじゃないのよ、芳さん」

「そうなんです」

「私は子供のころから、父に言われていたことを習慣でしていたものだから…」

「どんなふうに？」

「人型に息を吹きかけて全身を撫でていたのよ。時には一晩、枕の下に敷いていたこともあったの。それをうちの子供たちが小さいころからさせていたので、一年に一回のことだけど習慣のようになっていたのね。特に頭は念入りに撫でて、賢くなりますように…ってね」

「そうなんですか、じゃあ、今年は私もそうしてみます。蒼汰朗にも」

「そうね、それがいいわね」

「でも、コロナ禍の今だからこそ、大祓はらいって大切ですね」

「本当にそうだと思うわ。疫病退散…、大難を小難に、小難を無難に…。節分にはしっかりお祓はらいしていただきましょうね」

「そうだ、芳は、人型用紙の中に書いてあるマークは何か分かるかな？」
大地が芳に質問した。

「あの象形文字のようなもの。そういえば、何かなと思ったことはあつたけど、意識してなかったかも」

「あれはね、修祓^{しゅうばつ}の二文字をつなげて書いてあるんだよ」

「へえ、そうなんだ」

二人の会話を耳にし、京子が近くに置いていた人型用紙を芳に手渡した。

「あつ、ホントだ。何となく分かる」

「芳さん、それ、私の受け売りよ」

「なんだ、そうなの」

芳の反応に、大地は苦笑いした。

子育て

「人型用紙の修祓しゅうぼつ マークもそうだけど、人間って見慣れすぎてしまうと、気にも留めていないことつて多いものだよ。同じように、当たり前のことが、本当は当たり前じゃない、ありがたいことなんだということを、つい忘れてしまっているなあ。今のコロナ禍で、みんながそのことを感じるようになったんじゃないかな」

剛がしみじみと言った。

「そうですね。本当なら、今ここにちあきちゃんがいるのが当たり前ですものね」
芳かおるが言った。

「そうそう、私もそう思う。いつもなら、そこでみんなとおせちを食べているはずだもん」
画面の向こうからちあきが発言した。

「でもね、こんな状況だから、忘れていたことに気付かされることもあるのよね」

「えっ、何？」

「先月の二十日ごろだったかな、職場から帰る電車の中で高校生の男の子たちの会話が耳に入ってきたのよね。その子、いつもならお正月は離れて暮らすおじいちゃん、おばあちゃんのところに行くはずで、楽しみにしていたよね。もちろんお年玉をもらえるっ

てこともあるようだったけど。でも、今年はコロナで東京からは行けないって言うの」

「ちあきちゃんと同じね」

「で、その子偉いのよ。今まで書いたことなかったけど、今年初めておじいちゃん、おばあちゃん宛てに年賀状を書いたんだって。うちみたいにオンラインはできないから、せめて年賀状くらいはって。ね、イイ話でしょ。私、その会話を聞きながら、コロナでつらいことも多いけど、良いこともあるんだなって思ったわけ」

「へえ、孫から年賀状を受け取ったおじいさんとおばあさんは、今頃きつと喜んでるでしょうね」

芳がちあきの話に頷きながら応えた。

「そうだ、うちも届いているかな？」

おせち料理の里芋を頬張っていた司は、箸を置いて席を立ち、ほどなく戻ってきた。

「また雪が降ってきたよ」

そう言いながら司は年賀状の束を剛に渡した。

「お父さん、うちの年賀状は蒼汰朗の写真だからね」

大地がすかさず言った。

「おつ、そうか、じゃあそれだけ見せてもらおうかな」
剛は年賀状をめくった。

「あつた、あつた。こりゃかわいいな、ほら」

剛は相好を崩しながら、京子に手渡した。

「あらホント、良い写真」

「かわいいね、蒼汰朗」

司が京子の手元をのぞき込んだ。

「私にも見せてよ」

画面のちあきがじれったそうに言った。

「はいはい」

司が年賀状を受け取り、パソコンのカメラに向けた。

「ホント、良い写真だね」

「ちあきにも送ったはずだよね、芳」

「はい、送りましたよ」

「たぶんまだ届いていないと思うから、楽しみ」

「ほら、誰だ？」

司が年賀状の写真を蒼汰朗に見せた。それが自分だと分かったのか、蒼汰朗は写真を指さして恥ずかしそうにした。そのしぐさが愛らしく、みんなの笑い声がリビングに広がった。終日、雨宮家には和やかな時が流れた。

三月、北アルプスの山々には雪が残り、平地の梅のつぼみもまだ堅い。それでも確かに春は近づいている。

大地は結婚後、実家から出て長野市内で芳との新居を持った。取りあえずアパートを借り、新婚生活をスタートした。

東川芳との最初の出会いは六年前、聖地での大道場修行だった。当時大地が二十八歳、芳が二十五歳。その時は、互いに相手を意識してはいなかったが、その後、大祭参拝などで聖地で会う機会が重なり、次第にお互いが気になる存在になっていった。

電話やLINEでの交流はもとより、長野と静岡というそう遠くない距離も幸いし、たびたび会う機会を作った。一年ほどの間に二人の仲は深まり、二年足らずでのゴールインとなった。

大本の信仰家庭で育った芳だったが、大地同様、青年部活動に積極的に参加していたわけでもなく、信徒籍もなかった。しかし、大道場修行での出会いであったことから、神さまがご縁を結んでくださったのだと感じていた。大地も同じ気持ちだった。

二人の間では、大本のことをはじめ共通の話題も多く、次第に互いの価値観が近いことを感じていた。何より一緒にいて心地よかった。

結婚を前に二人はそろって大本に入信し、天恩郷・万祥殿で華燭かしこの典を挙げた。これには大地の母・京子、そして何より綾部の祖父母が大層喜んでくれた。

芳の両親、それに大地の祖父・松太郎の勧めもあって、自宅にはご神号幅を奉斎することになり、新婚生活のスタートとともに、信仰生活も始まった。

まずは、朝夕拜の励行。一日の始まりに二人そろって神さまに手を合わせて、夕食前に一日の感謝をささげる。大地は、自分一人だと長続きしないかも…と思ったが、芳と二人だと意外と続けられた。

しばらくするとニューフェイスが加わり、家族三人での楽しい日々が続いた。仕事で嫌なことがあっても、蒼汰朗の笑顔を見ると疲れも吹っ飛び、癒やされている自分があった。子供の力はスゴイ！と実感する。蒼汰朗のおかげで親となり、自身の両親に対する気持ちにも変化を感じるようになった。

芳は実家のある静岡で蒼汰朗を出産し、長野に帰ってからは、子育てに専念している。初体験で分からないことばかりだったが、何か悩みがあると京子に相談することがしばしばであった。

「子供が三歳までは、楽しいことばかりよ」

ある時、京子は『寸葉集』を手に、三代教主さまのお示しを紹介してくれた。

母（二代教主）は、こんなことを言っていました。

「わたしは子どもに孝行などしてもらおうとも思いません。子どもの小さい時に、子どもを育てることで充分楽しませてもらいましたので」と。

乳児が知恵つきつつ成長してゆく課程の愛らしさ、そして大人になってゆく美しさ、おもしろさを、母は大きな愛情をもってよく見、よく味わいつつ、苦しみもまた楽しみとして育ててきたことだけで充ち足りていたのでしょうか。

母のこの言葉のもつ深い含蓄と、ただならぬ偉大さに頭のさがる思いがいたします。

「芳さん、今はしっかり子育てを楽しむのよ。小さいうちはね、ちやうど子供に“楽し

みや喜び”という借金をしているようなものだからね。子供が大きくなるにつれて何らかの苦勞は必ずあると思うけど、その時は、その借金を返済していると思えばいいのよ。それに時々、ボーナスもあるしね。私にとって、あなたたちの結婚は大きなボーナスだったわ」

芳は京子のアドバイスに助けられ、気持ちに楽になったこともたびたびであった。

♪ピンポン

インターホンのチャイムが鳴った。蒼汰朗が反応して、真っ先に玄関へ向かってちょこちょこ走った。

「蒼汰朗、誰かな？」

後から付いて来た芳が玄関のドアを開けた。

「やー、蒼汰朗、こんにちは」

蒼汰朗は素早く芳の後ろへ回り、芳の陰から司の顔をじつと見た。

「あら、恥ずかしいの。ほら、司おじさんよ」

「だから、芳姉さん、おじさんじゃなくて、司兄さんと教え込まないとダメだよ。でも、マスクしているから分からないかな」

司は、おじさんと呼ばれることに妙に抵抗していた。

「これ、野沢菜」

「ありがとう、うれしい」

京子から頼まれて、司が自家製の野沢菜漬けを届けに来たのだった。

「で、これは…」

とポケットから小さな車のおもちゃを取り出し、しゃがんで蒼汰朗の目の前に差し出した。蒼汰朗は急に笑顔になり、車をつかんだ。

「あら、もらったらどうするの」

蒼汰朗はニコニコしながら、小さく頭を下げた。そのしぐさがかわいく、司は蒼汰朗の頭をなでた。

「どうぞ、上がつて」

「はい、お邪魔します」

司が奥へ進んだ。

「司、いらっしやい」

大地が顔を出した。

「野菜を届けていただいたの」

「そっか、ありがとう。ま、どうぞ」

大地がリビングに誘い入れた。

「ここへ来たの、半年ぶりかな？」

司がコートを脱ぎながら言った。部屋にはコーヒーの香ばしい香りが立ち込めている。

「えっ、そんなになるかな」

「去年の秋以来だと思っよ」

「コロナで会う機会も少なくなったからな」

「それもあるよね」

二人は芳が入れたコーヒーを飲みながら、兄弟で近況を語り合った。すぐそばでは蒼汰朗がお気に入りの機関車のおもちゃと、さつきもらった車で楽しそうに遊んでいる。

「そうそう、夕べね、すごく面白いというか、興味深い映画を見たんだけど、お兄ちゃんはどう知ってるかな？」

「ん、何ていう映画？」

大地が訝しげに訊いた。

自然破壊のツケ

「『コンティジョン』というアメリカ映画なんだけどね」

「コンティジョン？」

大地が司に聞き返した。

「まるで今の新型コロナウイルスの感染拡大を予言したような映画で、しかも十年前に制作されているんだ」

「へえ、そんな映画があつたのか。もう一昔前になるけど、日本にも国内で未知のウイルスがまん延したストーリーの『感染列島』という映画があつたな。確か英語版のタイトルが『パンデミック』。僕も半年くらい前にネット動画で見て、今のコロナ禍を思わせる現実味があつて、びっくりしたことがあつただけだね」

「それ、僕も見ただよ」

「なんだ、そうか」

「でも、コンティジョンは、もつとリアルに今の世界の感染の様子を連想させる…というか、そのまんまという印象なんだよ。マット・デイモンが主演で、ジュード・ロウや大勢のハリウッドスターが出演していてね。新種のウイルス感染が日を追って世

界中に拡大していく恐怖が、とにかく現実味を帯びて伝わってくるんだ。日本での感染の場面もあつて見応えあつたよ」

司が真剣な表情で話を続けた。

「司、タイトルの『コンテイジョン』の意味は？」

大地がコーヒーを飲みながら訊いた。

「確か、伝染」

「そうか、面白そうだな。僕も見してみようか」

「見ておいて損はない、お薦めの映画だよ。当初アメリカでは、ぜっかく豪華なスターを集めたのに地味すぎる」とか『単調で飽きた』なんていうレビューも多かったようだけど、今は大注目されて、『リアリティーがありすぎて怖くなった』という評判で、僕も見えていて怖いくらいだったよ」

司が顔をしかめた。

「この手のハリウッド映画にありがちなアクションやラブシーンはないんだけど、ストーリーがよく考えられていて、パンデミックの二日目から、淡々と時系列に追って

いるんだ。この二日目から始まるのがミソだね。日を追って、いくつかの視点で感染の進行状況を描いているんだ」

「その一つに日本でのシーンもあるわけだな」

「そうそう、日本では路線バスの中で感染者が発症するという想定だったね。実際の新型コロナウイルスよりもかなり速い感染スピードだけどね」

「そうなのか」

「映画の最初は、マット・デイモンの奥さんが感染して死んでしまい、追い打ちをかけるように小学生の息子も亡くなってしまう。でも、父親と娘にはたまたま免疫があったのか、感染しないんだよ。それとか、患者の対応に追われる医師が感染したり、防護服を着た作業員がゴーストタウン化した市街地を消毒するシーン、無人の量販店で品物を略奪する暴徒化した住民なんかの場面は、去年世界のあちこちで報道された光景と同じだ…と思ったな」

司が詳しく映画の内容を語った。

「あら、二人とも真剣な顔ね」

芳かおるがお茶とお菓子かしを運んできた。

「面白い映画の話ですよ」

「ちよつと聞こえていたけど、なんだか怖そうね」

「ホラー映画じゃないですよ、でも違う意味で怖いんです」

「私、怖いのが苦手」

「芳は怖がりだから見なくていいよ」

「あら、大地君は見るつもりなの」

「たぶん…」

大地が小声で言った。

「じゃあ、一緒に見よっかな」

そう言いながら芳は、お茶とお菓子を司の前に置いた。皿に盛られた三色団子を目ざとく見つけた蒼汰朗が、おもちゃを置いて近づいて来た。

「これはダメよ。蒼汰朗は、こっちな」

芳が小さく切ったバナナをテーブルに置くと、蒼汰朗はすかさず口に頬張った。

「ん、このお茶は、えんめい茶かな？」

司が湯飲みを持ったまま訊いた。

「さすが、司君。よく分かったわね」

芳が感心して言った。

「これ山野草のお茶で、カフェインが入ってないから、蒼汰朗にもいいよね」

「そうなの。お母さんから教えてもらって、蒼汰朗も時々飲んでるのよ」

「そうだったんだ」

司は、出された三色団子の串を持ち、一つかじった。

「ねえ司君、三色団子は『飽きない団子』だって知ってる？」

芳が訊いた。

「飽きない、ですか？ いや知らないです。おいしくって飽きないってことです
か？」

「ハズレ」

「え〜」

「どうしてか、知りたい？」

「はい」

「芳、じらすなあ…」

大地が笑いながら言った。

「実はこの団子の色が由来なのよ」

芳が団子を指さした。

「色？」

「このピンクは桜色で春を表し、白は雪で冬を表すんだって。で、緑色は新緑で夏。ということば？」

「春・夏・冬か、ということばは、秋がないですね」

「そう、秋がないから……」

司が頭をひねった。

「そっか、“秋がない”から、あき・ない、“飽きない”ですか」

「正解！」

「なんだ、ダジャレじゃないですか」

「まあ、そんなところね。でも、飽きないは商売の“商い”にもつながるから、それこそ縁起が良いのかもね」

それを聞いて大地が話に割り込んできた。

「ついでに言うと、入り口に、“春夏冬^{なか}中”という札を出している店があるんだけど、これはどういう意味でしょう？」

司が腕を組み、しばらくして答えた。

「分かった、秋なかない中だから、”商ちゅうい中”」

「ご名答。営業中ってことだな」

「なるほど、勉強になりました。では、冬と夏を頂こうかな」

司は団子を食べ終わって、映画の続きを話し始めた。

「コンテイジョンでは、感染の恐怖と戦う難しさ、偽情報によるパニック、都市封鎖、医療崩壊、ワクチンの入争いといった場面が続くんだ。グローバル化で世界が狭くなったことも伝わってきたよ。この映画を見てから今の世の中を見ると、現実がまるで映画の続編かと思えるくらいなんだ」

「なるほどね。グローバル化の流れは止まらないよな。二十年ほど前にSARSがアジアやカナダを中心に感染拡大したけど、幸いにも日本には入ってこなかった。MERSもヨーロッパでは広がったけど、日本は大丈夫だったんだ。でもそれ以降、世界は急速にグローバル化が進んで、今は国境を越えるのもアツと言う間で、今回の新型コロナウイルスは瞬く間に、全世界に広がったわけだからな」

大地が真剣な表情で言った。

「そうだね。それにしてもこの映画を十年も前に制作していたことに驚いたな。当時、なぜ日本であまり話題にならなかったのかと思ったら、日本は東日本大震災の渦中だったからみたいだね」

そう言つて司はしばらく考えてから、話を続けた。

「どうしようか、映画のラストは、これから見るお兄ちゃんには言わない方がいいかな？」

司がわざと独り言のように言つた。

「いいよ、ここまで詳しく解説してくれているし、どうせしゃべりたいんだろ。僕もいつ見られるか分からないしね」

大地が見透かしたように言つた。

「バレた？」

司は、じゃあと言つてお茶で口を潤した。

「憎いのが映画のラストなんだ。ストーリーがパンデミックの二日目から始まっているって言つたでしょ。で、最後に感染の一日目、パンデミックの原因が映し出されるんだ」

「なるほど」

「感染の始まりは武漢じゃなくて、香港っていう設定なんだけど、ウイルスの由来は、なんとコウモリで、家畜の豚にウイルスが運ばれ、その豚を通して人間に感染するっていう起源だったんだ。でもね、そのシーンを見て、＼エッ、こんなことから＼って思ったんだ。日常のささいな出来事が、ウイルスの発生源なのかと思うと、正直ゾッとしたな」

「へえ、そうなのか。確か、『感染列島』も似たような想定じゃなかったかな。南洋のどこかのジャングルのコウモリだったような気がするな。結局、人間が経済優先で森林を伐採し続けていったツケが回ってきたということだよ。経済繁栄の裏側では、大きな犠牲が払われている」

「そうだね、二つの映画の内容は、人間のエゴや欲望、自然破壊への警鐘ということだね。でも、僕ら自身の問題でもあるな」

天井を見上げながら、司は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「大本の聖師さまは、

大三災小三災の頻発も

人のこころの反映なりけり

というお歌を詠んでおられるんだけど、僕は最初、あまりピンと来なかったんだ。でも、今回のコロナ禍で理解できるようになった気がする。感染症は小三災の飢病・戦の病に当たるだろ。自然破壊も経済優先も、利便性や金品を求める人間の心にあると思うと、このお歌の意味がストンとおなかに入った気がしたんだ」

「確かに、そういうことだね」

司が同調した。

「人類の行き過ぎた開発が、自然の奥に潜んでいたウイルスとの接点を生んで、それが今のコロナ危機につながったのかもしれないなあ。だから、今のうちに過ちに気付いて、根本的な反省に立たないと、この子らの未来が心配になってくるよ」

大地は、傍らで無邪気に遊ぶ蒼汰朗に目をやった。

皆神山

今年は全国的に、例年より早く春がやって来た。信濃路でも三月の末から桜の開花が始まり、四月に入るとあちこちの桜の名所から満開の便りが届いた。しかし、新型コロナウイルス感染症再拡大への懸念から、桜の下での宴はどこも自粛。長野市の隣、須坂市にある臥竜公園の「さくらまつり」も、開催されたものの期間短縮、夜桜ライトアップも中止となった。

大地たち親子も、臥竜公園内を歩きながら桜を愛で、しばしの春を楽しんだ。

今年は芽吹きも早かった。桜が散るのを待たずに若葉が萌え、四月末には残雪の北信五岳と新緑が、鮮やかなコントラストを呈していた。

大地一家は、週末を利用し車でのハイキングに出掛けた。手作り弁当を持って、できるだけ人との接触を避け、近場へ足を運ぶことにした。

「さあ準備はいいかな、出発するよ」

大地が後部座席のチャイルドシートに座った蒼汰朗の様子を確認しながら言った。

「はい、大丈夫よ。お天気が良くなって、ありがたいね。蒼汰朗もうれしそう」

芳^{かおる}が笑顔で言った。

「では、まず皆神山^{みなかみやま}へ向かいます」

大地は車をガレージから出した。

「皆神山は最近お参りできてなかったから、久しぶりって感じね。毎年春と秋に大祭をしていたんでしょ？」

芳^きが訊いた。

「そうだよ。春は長野主会だけで、秋には東海教区の各機関が協力して祭典をしていったんだ。節目の年には、全国にも呼び掛けて盛大にお祭りをしていただけど…」

「コロナでできなくなったのよね」

「そう。この春もコロナの影響で、会長が代表で参拝しただけらしいな。皆神神社としても、境内に大勢の人が集まるのは避けたかっただろうからね」

「仕方ないわね」

「この様子だと、秋の大祭も代表でお参りするだけになりそうなんだって」

「寂しいことね。でも、家族三人なら大丈夫だよね」

「たぶんね」

皆神山は、長野市松代町まつしろまちの東南に位置し、標高六五九メートル、周囲約八キロメートルの安山岩あんざんがんの溶岩ドームで、麓からは二八〇メートルほどの高さである。頂上の皆神社近くまで、車で上ることができる。

周囲の山並みと異なり、地面から盛り上がったように独立している独特の山容から、人工物だと言う者も出てき、「太古に作られた世界最大のピラミッド」という説が起ったくらい珍しい山である。地元では毎年「ピラミッド祭り」なるものが開催されている。

大本にとつてはゆかり深い霊山で、聖師さまは以下のようにお示しになっている。

信濃の国松代町の郊外にある皆神山は尊い神山であつて、地質学上世界の山脈十字形をなせる地であり、世界の中心地点である。四囲は山が十重二十重とえはにとりかこんで、綾部、亀岡の地勢とすこしもちがわぬ連華台れんげだいである。ただ綾部は日本の山脈十字形をなせる地で、これはまた世界的であるだけの違いである。（『月鏡』）

「聖師さまが高熊山で修行された時、霊界に入られ、最初に連れて来られたのが皆神

山だったのよね」

「そうそう、修行中、神懸かりになって最初に連れて来られたのが富士山と皆神山で、空中から眺められたそうだよ。霊界の皆神山は実物よりはるかに大きくてきれいで、形はまったく変わらなかつたんだって。聖師さまは、その時の様子を歌に詠んでおられたはずだよ」

大地が言う聖師さまのお歌が以下である。

吾^{われ}は空ゆく鳥なれや

はるかに高き雲に乗り

世も久方の空の海

深き恵みに包まれて

高き稜^{みづ}威を仰ぎつつ

下界はるかに見はらせば

地上の人は自己愛に

包まれ手振り足振りを

してる姿の面白や

○

神の翼に抱かれながら

魂は駿河の富士詣で

富士の高嶺にわが魂たちて

秋津島根をみはるかす

神の使は皆神山に

われを松代つれてゆく

山脈十字の信濃の国は

永遠の礎神守る

富士の高嶺や皆神山を

あとにわが魂帰り来る

眼覚ませば小夜更け渡り

峰の松風身にしみる

此処は何処よとよくよく見れば

稜威高熊巖の洞

高熊御山の四十八宝座

雪の降る夜を静座する

夜は淋しい松吹く風の

音も聞えず霜が降る

寒さひだるさこらへて一人

更くる霜夜に道辿る

天津御国も根底の国も

悟りそめたる洞の中

夜風身にしむ淋しさ襲ふ

飢ゑと渴きが身に迫る

土と火水の御恩を悟り

神に感謝の涙する

(歌集『故山の夢』)

「現界の皆神山もそこその大ききだけど、霊界ではどれだけ大きかったんだろうね」

「ん…、想像できないわ」

芳が首をひねった。

「聖師さまは、実際に皆神山に登っておられるんですよ」

「そうだよ。確か、昭和四年かな。その時に、素戔鳴尊すさののみことが皆神山で比良加ひらか（平瓮）を焼かれていて、それが陶器の初まりだともおっしゃっているんだって」

「ヒラカって何？」

「平たい土器のお皿のことだよ。たぶん神さまにお供えする“かわらけ”だったんじゃない」

「あの三方にのせる“かわらけ”のこと？」

「だって、土器とかいて“かわらけ”って読むでしょ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ陶器発祥の地ということね」

「神代のことだと思っけどね」

「あつ、そういうことね」

大地の運転する車は長野市内を抜け、国道十八号線から県道三十五号線を南に入り、千曲川ちくまに架かる松代大橋を越えた。その先の上信越自動車道の高架下を潜ると、十数階建ての白いホテルが目飛び込んでくる。一九九八年の長野冬季オリンピックに併せて建てられたもので、何度か名前が変わり、現在はロイヤルホテル長野となっている。

平成十六年と二十一年の秋、皆神山の記念大祭に併せて行われた「皆神山ウオーク」では、このホテル前の駐車場が起点となり、教主さまと共に皆神山山上を目指した。

「ここへ来ると思い出すんだよね。あの時、僕は高一でウオーク隊に参加していたんだけど、教主さまがホテルの前で、エスプレントで出発の号令をかけられた情景が、すごく印象に残っているんだ」

大地が懐かしそうに言った。

「私も両親に勧められて、何かあるのかよく分からないで参加したけど、とても楽しかったっていう記憶があるのよ」

「良い思い出だね」

「そうね」

チャイルドシートの蒼汰朗は、相変わらず機関車のおもちゃを手にご機嫌である。

松代は、六文銭の家紋で知られる真田氏の居城・松代城：別名・海津城かいづがあった町である。

松代城は、武田信玄が上杉謙信と戦うための拠点として山本勘助に命じて築かせた城で、千曲川のほとりという地形を生かした天然要塞だった。その後、一六二二年（元

和八）に真田信之が上田城から移って以来、真田氏十代が城主として続いた。

ほかにも幕末に開国論者として名を馳^はせた佐久間象山^{しょうざん}をまつる象山神社など、歴史を感じさせる城下町の風情がそこかしこに残っている。

「芳、松代、って良い名前だと思わないか？」

「そうね、良い名前……かな？」

「ほら、松の代と書くだろ、まつだよ」

「あ、そうか、みろくの世ということね。ほんとだ、良い名前だね」

皆神山へ車で上るときには、山の反対側から頂上へアクセスすることになる。大地は山裾の左手の道を走り、住宅街を抜けて上り口へ向かった。途中数箇所急カーブがあるものの、さほどの急斜面でもなく、楽に上り切ることができる。

道中、見落としやすいのが、中腹に鎮座する岩戸神社だ。天照皇大神^{あまてらすおおかみ}を祭り、皆神山ピラミッドの入り口ではないかといわれる小さな岩穴がある。その奥は謎とされている……との説明があるが、定かではない。

しばらく進むと視界が開けてくる。秋になると道の両側がススキの群生となる。車は、ほどなく山上の駐車場に到着した。

「さあ、着いたよ」

大地が蒼汰朗を車の外に下ろすと、待つてましたとばかり走りだした。

「ほら、蒼汰朗、危ないから待つて」

芳が慌てて追い掛け、蒼汰朗の手をつかんだ。三人は、入り口の随神門ずいじんの石段を上った。大地と芳が一礼すると、蒼汰朗も小さく頭を下げた。

石の宮

境内に入ると、少し空気が変わったような気がした。蒼汰朗^{そうたろう}が手を振りほどき、またチヨコチヨコ走りだしたが、数メートル進んですぐに立ち止まった。初めての場所
で勝手が違うためか、少し戸惑っているようにも見えた。大地と芳^{かわる}が追いつくと、蒼
汰朗が芳の手を掴^{つか}んだ。

正面に延びる参道の左側に社務所がある。普段は無人のようだ。

「祭員はここで着替えをするんだ」

大地が社務所を見ながら言った。

「最初にお手伝いに来た時、私もここでお茶出しをさせていただいたの。この境内には水道がないから、ポリタンクで水を運んでくるのよね」

「そうそう、祭員の手水もポリタンクで運んでいるね。お抹茶接待をするときには、たくさん使うんで大変だって言ってたなあ。みんなだんだん年を取ってくるから、駐車場からここまで運ぶのも一苦労のようだよ」

「大変よね」

社務所を過ぎると六段ほどの石段がある。蒼汰朗も芳に手を引かれながら、一段ずつ大股で上がった。上り切ってから「ワンワン」と言つて、右上を指さした。

「そう、ワンワンね」

芳が優しく言つた。

「狛犬こまいぬだから、ワンワンには間違いないか」

大地も頷うなずいた。

大地と芳は、正面の社殿に一礼した。

境内では一番大きな侍従神社である。

「ここは、実在した偉人を神さまとして奉斎しているみたいだね」

侍従神社に鎮まる侍従大神は、信州・佐久の内山城主だった内山美濃守満久みののかみの三男・下野守三郎満頭つげのかみ みつあきとのこと。十三歳で鞍馬山に入つて密教を嚴修し、ついには修験道を極め、のちに信濃全域の山伏の支配権を得ていたといわれている。死後、生前の姿を木像に写して侍従坊大天狗明王として祭られた。今から約四百六十年前のことである。それが明治に入ってから神仏分離令等で、侍従大神として奉斎されたという。

侍従神社前から右に折れ、さらに左に上がつて行くと、もう一つの社殿が立つて

いる。こちらが千三百年前に奉祀された熊野出速雄神社で、皆神山の本社とされ、

松代の産土社でもある。熊野の名が冠してあるように、紀州・熊野権現を勧進した神

社で、この地方では最古とある。ご祭神は、出速雄命、伊邪那岐命、伊邪那美命、速玉男命などで、農耕、芸術の神としてあがめられている。

熊野出速雄神社と侍従神社、そしてその他いくつかの社を合わせて「皆神社」と総称される。

大地たちは熊野出速雄神社に参拝した後、さらに右手奥へと参道を上った。少し進んだ左手の木立の中に、自然石の低い歌碑が立っている。大地たちは、歌碑の前まで行くと、蒼汰朗の目線に合わせるようにしゃがんだ。

「みすずかるしなのくにの神山にともらつどひて世をいのらなむ」

大地が歌碑の文字を目で追いながら、ゆっくりと詠み上げた。

三代教主さまが初めて皆神山に登拝されたのが昭和二十九年九月二十六日。その前夜、当時の長野支部で薄茶の接待を受けられた後、二代教主さまもお使いになったという貴人台（茶道具）に墨書されたのが、この碑のお歌である。

「すてきな字よね」

「そうだね。三代さまがご自身で詠まれたお歌を、ご自身の書で碑にすることをお許しになったのは、これだけらしいよ」

「全国でこだけってことね」

「聖師さまのお歌を三代さまがお書きになったり、一文の碑はあるようだけどね」

「ということは、とても貴重だね」

「でも、これは二代目でね。初代は、ほら、あそこ」

そう言つて大地は、今上つてきた参道の向こう下手を指さした。

「そうだ、この前読んだ『みろくのよ』誌の五月号の教主さまインタビューに書いてあったよね」

「そう、教主さまがご就任になった年だから、ちょうど二十年前、三代さまの歌碑が心無い者によつて倒されて、その三カ月後にアメリカで同時多発テロが起こったんだ。それから世界で紛争やテロが頻発するようになったから、教主さまは、衝撃的な出来事として覚えておられると書いてあったね」

「インタビューの冒頭でおつしやつていたから、私も印象的だったわ」

大地と芳は、目を合わせて頷いた。うなず

蒼汰朗は退屈してきたのか、芳に抱きついてきた。

「喉が乾いたね、お茶飲もうか」

芳はトートバッグから水筒を取り出してコップにお茶を注ぎ、蒼汰朗に渡した。蒼汰朗は両手でコップを持ち、上手に飲み干した。

「さあ、上に行こうか」

三人は参道に戻り、途中の鳥居をくぐって頂上へ向かった。歌碑からは二十メートルくらいの距離だろうか、そこには奥の宮がある。神社の境内図には、「富士浅間神社」と記されているが、大本では「奥社」とか「石の宮」と呼んでいる。

昭和四十八年、大本から献納・建立されたこの石の宮には、三代教主さまによる『「おおもとすめおおみかみ」大本皇大神』のご真筆と、もともと皆神神社に祭られていた木花咲耶姫命このはなさくやひめのみことさまの木製のご神像が奉斎されているという。

「このお宮は、本当は亀岡の瑞泉苑に建てられるはずだったんだって」

大地がお宮の起源を説明した。

「聖師さまがお生まれになったところ？」

「そう、第二次大本事件まで瑞泉苑にあった石のお宮を、当時のままに復元されるこ

とになっていたらしいよ。何て言ったかな…、確か…「神聖神社」

「それがどうしてここに立ったの？」

「さあ、僕も大道場修行で瑞泉苑参拝の時に聞いたんだけど、案内してもらった先生も理由は分からないって言ってた。皆神山に石の宮が建つ二年ほど前に、瑞泉苑での石の宮再建が機関誌で発表されていたけど、なぜだかそれが、皆神山に建てられたそうなんだ。あのお宮が事件前の神聖神社の“写し”だという当時の記事が残っているらしいね。修行では、僕が長野出身だからっていうので、そんな説明をしてくれたんだ」「なんだか不思議なご縁がありそうね」

石の宮の周囲は、風雪を凌ぐ^{しの}ために、立派な上屋で守られている。三人は石の宮の正面に立ち、大地の先達で天津祝詞を奏上した。蒼汰朗も二人の動作に合わせて、頭を下げたり、拍手をした。その仕草が愛らしく、芳は祝詞を上げながら笑顔になった。神号奉称のご神名は、「^{おおもとすめ}大天主^{おおみかみ}太神」と「木花咲耶姫命」である。二人は心地よく祝詞を上げたが、蒼汰朗はすぐに飽きてきたようで、途中から二人の周りを歩きだした。

「上手だったね」

大地は蒼汰朗を抱きかかえ、頭を撫でた。

「ねえ、もう、ゴルフ場はやってないようね」

芳が周囲を見渡しながらかいた。以前営業していた皆神山ミニゴルフコースのことである。

「そうみたいだね。これだけ草が生えていたら、とてもグリーンとは言えないしね」

「でも、最初にここへ来た時には、私、ビックリしたわ。だって、神聖なお宮の目の前、三方がゴルフコースだったし、祭典中にプレーしているゴルフアーがいたんだもの」

「まったく霊地にはミスマッチだったよね。以前、祭典中にゴルフボールが飛んで来て、お尻に当たった参拝者もいたそうだよ」

「えっ、ホント!？」

「いつだったか母さんが、＼こんなものはそのうちに必ずなくなるはずよ…＼って言うていたんだ。僕は、どうかなあ？　と思っていたけど、＼予言＼通りになったね」

「お母さん、スゴイ！」

芳が目を見くしながら言った。

二人は両側から蒼汰朗の手を引き、ゆつくりと参道を下りた。

「そう言えば、確か…」

鳥居から少し下ったところで、大地が左の方へ目をやった。

「これが、教主さまお手植えのコノハナザクラだね」

教主さまがご就任になって三年後の平成十六年、記念大祭の時に教主さまによって三代教主さまの歌碑の除幕がなされ、それに続いて植樹式が行われた。その時のコノハナザクラである。

この時、教主さまは、二首の歌をお詠みになっている。

貴人^{きにんだい}台^{だい}にしるし給^{たま}ひし三代教主^{さんだいきうしゆ}様がみ歌

五十年^{いそとせ}めぐり今ぞ歌碑^{かひ}建つ

皆神^{かみやま}山の木の花桜^{とほ}永遠^{とほ}に栄え

安^{やす}けきみ世^よを守らせ給へ

花の時期は過ぎ葉桜となっていたが、脇に由緒書きの銘板が立ち、木の周りを広く囲っている、すぐにそれと分かった。

「教主さまが植樹されたのは、皆神山ウオーク隊の時よね」

芳が訊いた。

「そうだよ。僕が高一の時さ」

「私は中学生だったから所々しか記憶にないけど、根元に土をかけておられる教主さまのお姿は覚えてるの。あの時は大勢の人だったよね」

「僕も、歌碑の除幕と、植樹シーンは覚えてるなあ。でもよく考えたら、あれから一度も花が咲いたところは見てないんだよね。なんか、もったいないことだな」

「本当にそうよね。来年は花の時期に来ましようね」

「そうしよう。四月中ごろかな」

木花咲耶姫命が祭られているこの神山で美しく清楚なコノハナザクラを見たい…、そういう願いが大地と芳の心に湧き上がってきた。

「こんな気持ちになったことが、きつとおかげだね。それに蒼汰朗にも見せてやりたしいしね」

皆神山を吹き抜ける薫風のように、爽やかな気持ちに満たされ、三人は楽しみに参道を下った。

ワクチン

皆神山を後にした大地一家三人は、安曇野^{あづみの}方面へ足を延ばした。松代^{まつしろ}から高速を使つて約一時間、向かったのは日本一の敷地面積を誇る「大王わさび農場」である。

豊かな北アルプスの雪解け水が伏流水となつて扇状地の下をくぐり抜け、安曇野市穂高の地に湧き出ている。その原野の一角を大正初期から二十年の歳月をかけて開墾し、今日まで清冽^{せいれつ}な水を利用して、ワサビ栽培が行われている。安曇野を代表する観光スポットであり、大地と芳^{かおる}にとつては結婚前のデートコースとして思い出の場所でもあった。

「懐かしいわね」

「ここは何度来てもいいところだな。やつぱりこの清流と水車は、雰囲気あるよね」

黒澤明監督の映画「夢」の第六話「水車のある村」のロケが行われたことで一躍有名となった。中でも農場の脇を流れる万水川^{よろぎがわ}と犀川^{さいがわ}の合流地点の自然が監督の目に留まり、映画のセットとして三つの水車が作られ、今もそのまま残されている。雪解け水の流れに素朴な音を立てながら回る水車が、映画のワンシーンのように、訪れる人をしばし「夢」の世界へいざなうようである。

場内を一巡したところで、蒼汰朗そうたろうはおながすいてきた様子。ベンチで弁当を広げようかと思っていたが、持ち込みはNGとのこと。仕方なく大地は農場周辺の田園へ車を出し、広めの路肩を見つけてエンジンを切った。

「田んぼがあつて良いとこね。じゃあ、お昼を頂きましよ。一緒に三首のお歌ね」

芳に促され大地が、天の恩…と発声すると、蒼汰朗が小さな手を合わせ、それをまねた。

「てんのおん、つちのめぐみに、うまれーたらー、いったらちまーしゅ」
車内に笑いが起こった。

「短縮バージョンだけど、うまいもんだよ」

親バカである。

「ささやかな幸せって感じよね」

芳が蒼汰朗の頬についた米粒をつまんで口に入れ、小さくほほ笑んだ。

○

令和三年の夏がやってきた。

全国的に梅雨入りが早かった今年、夏の訪れも、やけに早足でやってきたようだ。

修景事業を展開している小布施^{おぶせ}の町も、コロナ禍で、観光客の姿がまばらになっている。そんな中、大本北信支部に本部から久しぶりの来客があった。かつて東海教区の特派宣伝使であった高村浩一である。

皆神山の石の宮とコノハナザクラの視察のため、長野へ来訪。時間に余裕があったため、特派時代に世話になった小布施^{まちむらとえ}の町村音江宅まで足を延ばすことにしたのだ。た。

「すみません、突然押し掛けて、ご迷惑じゃなかったですか？」

「何をおっしゃいますか。思いがけず先生にお会いできて、こんなありがたいことはないです。お仕事お忙しいでしょうに、忘れずにいてくださって、ホントうれしいこと」
「ここは忘れられませんよ。当時はまだ支部ではなかったですが、町村さんにはとてもお世話になりましたからね」

二人はしばし思い出話に花を咲かせた。

「ところで先生、今のコロナワクチンの接種について、本部はどんな見解ですか？」

町村が話を変えた。

「シリアスな質問ですね」

「支部の皆さんに訊^きかれるので困^{こま}ってるんですよ。ちょうど良い機会だから、聞かせ

てもらえたらありがたいのですが…」

「分かりました。では…」

高村は一度背筋を伸ばして、説明を始めた。

「ワクチン接種は、決して強制でなく、本人が希望する場合に限り、接種を受けることができるというものですよね」

「今回はそうですね。強制といえば、大本の歴史でも、幼い三代さまへの種痘を水晶の御魂みたまを守るということで、開祖さまは拒絶されたという史実がありましたね」

「はい、でもその一件は今回のワクチン接種と比較はできませんね。神柱である三代さまだからこそそのエピソードだと思います。時代背景も医療環境も今とは違い過ぎます。もし今、ワクチンそのものに反対するのなら、インフルエンザをはじめ、今ある全てのワクチンの存在に反対しなければなりません。それに当時、開祖さまも聖師さまも、信徒に対して種痘を受けるなどと言っておられませんしね」

「確かにそうですね」

「ワクチンを受ける人は、接種によってコロナ発症の予防や重症化の軽減を期待する効果と、逆の副反応のリスクとの双方を考えないといけないわけですね。その両方を

理解した上で、自らの意思で接種するかしないかを判断するということです」

「はい」

「ですから、結論から言うと、今回のワクチン接種については、ご自身の判断でお願いします、と申し上げるしかありません」

「そうなのでしようが、私のようなおばあさんには、それが難しいですよ。何か分かりやすい材料は頂けないのですか？」

「これは多くの国民にとっても難しいことだと思いますし、正直、私も分かりません。本当のところ、治験的なことも含めて、科学的・医学的な正確な情報が全て開示されていないと考えるからです。だからむやみに、賛成とも反対とも言えないのが現実です」
「でも今、日本で認可されたワクチンは遺伝子組み換えなのでしょう？ 大本はこれまで、遺伝子組み換えに反対してきたじゃないですか？」

「そうですね。ただ、農作物の遺伝子“組み換え”とは、かなり違うようなのです。今回はそれを越える高度な技術で、遺伝子工学技術やゲノム編集の分野のものです。もちろんネット上では、副反応の被害としてたくさん情報が流れています。中には怪しいものもありますが、私たち素人にはそれを検証する科学的・医学的な説明の知

識が十分でないということです。

それに、遺伝子組み換え食品の場合は、それらを拒絶しても他に選択肢がたくさんあります。でも、ワクチンの場合は、打つか打たないか、二者択一の厳しい選択ですよね」

「なるほど、確かに違いはありますね」

「遺伝子組み換え食品の場合は、その理論もある程度分かっている、国全体としても社会的な反対運動が根強くあります。それに実害の結果が出るまでには、長い年月がかかります。でもワクチンの場合は、理論も時間も組み換え食品とは大きく異なります。

大本がこれまでに社会的な事象、特に人の命に関わることに異を唱えてきたのは、教義に基づく問題、生命倫理の問題、そして食の安全問題などと、それに反対する裏付けがあつたからです。今回のワクチン問題はその圏外にあつて、とても複雑です。ですから、社会的責任を負う教団としての立場を踏まえながら、私たちもこれからしっかりと研さんしていかなければと思っています」

「でも、時間がない人もありますよね」

「確かに、信者さんの中には、医療従事者ということで、自らの意思に反して接種し

ないといけない人もおられます。また世間では、接種を拒否したがために、退職を迫られるというニュースもあり、問題視されています」

「そうそう、差別的なひどい話ですね」

町村が顔をしかめた。

「今、信者さんの中にも、次の六つの立場があるかと思っています」

高村が順に指を立てながら話を続けた。

「・すでに接種した人

・接種したいと思っている人

・職務上接種せざるを得ない人

・しばらく接種を控える人

・接種しないと決めている人

・接種を迷っている人

私たちは、どの立場も理解し、尊重した上で “大難を小難に、小難を無難に” と、誰もが救われるよう願っています」

「なるほど、そうですね」

「もし、教団が強クワクチン接種を否定し、もしそれに従った信徒がコロナにかかって亡くなってしまったら、その遺族からはどう思われるでしょうか。大本は相当重い責任を問われることになるでしょう」

「それはそうですね。極端な強要をすれば、社会から怪しい教団だと思われると思いますね」

「おっしゃる通りです。もちろん、副反応がはっきりと分からない今、強制的に接種を勧めることもどうかと思います。年齢によっても難しい問題があります。特に若い女性の接種には警鐘を鳴らす専門家も多いそうですね」

「まあ、私はもう先が短いですけどね」

町村が嫌みっぽく言った。

「そういう意味ではないですよ、参ったな」

高村が頭をかいた。

「信者さんの中には、三代さまだったらこうされたんじゃないかとか、四代さまならこう…という人もいますけど、私はそんな方には、今は五代教主さまの時代なのだから、教主さまのご教示に神習かんならいましょう」とお話ししているんですが、それでいいん

ですよ」

「はい、その通りです。まさに今、このお示しを实践させていただかないといけません」
そう言うとき高村は、手元のカバンから資料を取り出し、町村に渡した。それには以下の教主さまのお示しが印刷されていた。

「私たち大本信徒は、百年前（※スペイン風邪の流行時）の聖師さまのお言葉の通り、このたびの新型コロナウイルス感染拡大に対しても同じように、衛生面、生活面で感染しないよう細心の注意を払って行動するとともに、今まで以上に神さまを敬い、正しき浄き信仰をさらに深めて心身の健全をはかり、天津祝詞や神言を日々奏上して霊界を浄めるご用にお仕えし、世の中の良い鏡となるよう努めさせていただきたいと存じます。

同時に歴代教主・教主補さま方の教えの通り、お土、お松、梅干しや梅肉エキスなどを頂くことも大切なことと思います」（令和二年みろく大祭教主さまごあいさつ）

「先生、私は毎日、ご神水、お松茶と梅干しは頂いていますよ」

町村が笑顔で言った。

「それは何よりです。最近ネット上では、松葉に含まれる“スラミン”という成分が

コロナにも有効だという情報がクローズアップされているんですよ。これが正しい情報なら、大本は世に先駆けていますね」

「本当ですね」

「町村さん、お互いに『自分は今われよしになってはいないか』と省みながら、お土とお松、梅干しなどを頂いて、ますます自己免疫力を高めるよう頑張りましょう」

高村が力強く言った。

梅干しとラツキヨウ

「そうですね、コロナ禍の今に限らず、神さまの深いご神意を悟らせていただくには、まずは元氣でないとねえ」

町村音江が確かめるように言った。

「そうです。心身共に健康が第一です。神さまから頂いている心、大本的に言うと直霊、^{ちよくれい}それと肉体の両方が丈夫なことが大切ですね。心と体が共に健康になる手立てとして、私たち大本信徒は、お土とお松、梅干しなどを信仰的に頂くことで、おかげを頂戴できると教えられています。町村さん、さつきお渡しした教主さまのお示しの前に、『おほもとしんゆ』と『寸葉集』の一節があるでしょ」

高村浩一は、町村が手にしていたプリントを指さした。

大本の経綸は病氣^{やまい}直^しして無いぞよ。神から頂いた結構な身魂^{みたま}を、がいこくの悪の霊魂^{みたま}にけがされて了^{しも}うて、肉体^{やまい}まで病魔^{いれもの}の容器^{いれもの}になって、元の大神に大変な不孝を掛けて居る人民^{やまいがみ}が、病神^{やまいがみ}に憑^つかれて居るのであるから、素の日本魂^{もとこ}に捻^ねじ直^しして、チットでも霊魂^{みたま}が光り出したら、病神^{やまいがみ}は恐^{こわ}がりて逃^にげて了^{しも}うぞよ。

(明治三十二年旧七月一日)

改心と申すのは、何事に由らず人間心を捨てて了うて、智慧や学を使りに致さず、神の申す事を一つも疑わずに、生まれ児の様になりて、神の教える事であるぞよ。

(大正五年旧十一月八日)

お土は神さまへの信仰によっていただくものです。それによって必ずご神徳はいただきます。

(『寸葉集』巻二)

「そうですね、お土もお松も梅干しも、市販の薬のように扱うのではなく、信仰によってお下げいただいているという気持ちをお忘れはいけません。まあ、町村さんには釈迦に説法でしょうけどね」

「そんなことないですよ。こうして時々、教えていただかないと肝心なことを忘れてしまっていたり、ついおろそかになっていることがありますからね。み教えは繰り返し頂くことが大切だと思いますよ」

町村は真剣な表情で言った。

「同感です。み教えを自分に都合の良いように解釈すると大変です。たちまち、慢心、取り違いになりますから、お互い注意したいものです」

高村も頷きながら言った。

「これからお土とお松、梅干しを素直に頂いて、私もまだまだ年に負けず、健康力を高めるように頑張りますね」

町村が笑顔で言い切った。

「はい、そうお願いします。町村さんは小まめに家庭菜園もされているようだし、血色も良いし、お元気そうですねから大丈夫ですね」

高村が笑顔で返した。

「はい、おかげさまで。悪いのはここくらいかねえ」

町村が頭に人差し指を当てながら言った。

「それなら、私も負けませんよ、町村さん」

「あら、そう」

笑い声が茶の間に響いた。

「今は毎日、キュウリがたくさん採れてね」

町村はお茶請けに出したキュウリの一夜漬けを高村に勧めながら言った。

「採れる時期はいつときですかね。それにしても、このキュウリおいしいですね」

高村がしみじみと言った。

「あら、先生も畑をなさっているの？」

「はい、少しだけ」

「どんなものを植えてらっしゃるの？」

「今だと、夏野菜が中心ですけど…、キュウリ、水ナス、賀茂^{かも}ナス、トマト、オクラ、

赤シソ、大葉、秋に向けてサツマイモとサトイモも植えていますね」

「あら、ずいぶんたくさんじゃないですか」

「まあ楽しみながら、少しずつですけどね」

「赤シソは、梅干し用ですか？」

「はい、今年は梅を二十キロ以上漬けました。半分は娘宅の分ですが、今回は五歳の孫娘と一緒に梅漬け作業をしたんですよ。赤シソはそれに使うのと、夏場のシソジュース用ですね。暑い時にはスキツとしますね」

「それはいいですね」

「今年漬けた梅の一部は、神苑内の梅です。天恩郷では、去年は極端に不作でしたが、

今年は打って変わって大豊作で、ここ十年くらいでは最高でした。確か四トンくらい収穫されたんですよ」

「神苑の梅が豊作だというのは、今の時期、とてもうれしいニュースですね」

「そうですね、とてもありがたいことですし、何か意味があるのかもしれないね。今年もコロナ禍で、収穫作業を近隣の信徒の皆さんにお願いできず、奉仕者だけで行い、丸二日かかりました」

「それは大変でしたね。本部の食堂で頂く梅干しも漬けたんですか？」

「はい。今年はたくさん漬けたと聞きました。梅には血液をきれいにする効果もあるそうですよ」

高村は梅の効能を語りだした。

「健康力を高めるためには、まず血液をきれいに保つことが大切だそうで、その条件の一つが、血液が弱アルカリ性であるということです。そこで、酸性食品とアルカリ性食品をバランスよく取ることが大切なのですが、今の日本人は、酸性食品に偏り過ぎています。その代表が白砂糖ですね」

「私も、甘い物が好きだから…」

「正しい砂糖の取り方は、体重一キロに対して一グラム以下らしいのですが、今、一日平均百グラム取っているようで、甘い物が好きな人はとても百グラムでは済まないですね」

「でしょうね」

「小さな生菓子に三十グラム、ミカンの缶ジュース一本には八十グラムの白砂糖が入っているとか。で、白砂糖百グラムを弱アルカリ性にしようと思うと、ニンジンだと四百四十グラムも食べないといけないんです。これはかなり大きなニンジン二本分です」
「あら、そんなには食べられませんね」

町村は驚いた表情で言った。

「そこで梅干しが登場です。酸っぱい梅干しなら十グラム…中粒のものを一個食べるだけで弱アルカリ性になるんです。梅肉エキスなら、三グラムでいいそうですよ」

「それはスゴイですね」

「ただし、調味料を使って食べやすくした甘い梅干しはダメですよ」

「でしょうね」

「冷蔵庫で保存してください、と表示された梅干しがありますが、冷蔵庫に入れておかないと腐ってしまう梅干しなんて、とんでもないことですよね」

四百二十年前の梅干しを食べた方の話ですが、その梅干しが非常においしかったと。そしてその成分を調べたら、今の梅干しと全然変わらなかったそうです。梅干しを入れた日の丸弁当や、おにぎりに梅干しを入れるのは、ご飯を腐りにくくするためですよ。これは私たちの先祖が、梅干しの殺菌力を利用してきた技ですね」

「市販のお弁当だと、ご飯の真ん中に小さいカリカリ梅が入っていますけど、あれは本来の意味からするとちよつと違うってことですね」

「そういうことでしょうね。いや、町村さん、梅干しの話をしていると、何だか口の中が酸っぱくなつたような気がしますね」

「ほんと、そうですね」

二人は笑顔で目を合わせた。

「そうそう、私、ラッキョウも作っているんですよ」

高村が思い出したように言った。

「鳥取のような砂地ではなくて、元は田んぼだった畑ですから、最初はうまくできるか不安でしたが、これが結構採れましてね」

「でも、収穫後が手間でしょ？」

「そうなんです。あんなに面倒くさいものだとは思いませんでした」

高村の言葉に実感が込もっていた。

「ここ数年、収穫後は毎年何時間もかけて処理しています。だから今は少なめにして、翌年の植え付け用を残して今年は五キロほどを漬けました」

「それでも、結構な量ですね」

「町村さん、市販のラッキョウって結構いい値段するでしょ。私も以前は、高いな〜って思っていましたけど、自分でやってみて、その理由が分かりました。漬けるまでの手間を考えたら当たり前ですね」

「先日たまたまテレビで鳥取のラッキョウ農家を見ましたけど、収穫後、根と茎を切るのを手作業でされていましたね。とっても大変そうでしたよ」

「ご存じだと思いますが、ラッキョウは、〃万病の妙薬〃って、聖師さまがおっしゃっていますね」

「そうそう、確か…」

二人は『月鏡』にある以下の聖師さまのラッキョウについてのお示しを思い出しながら、ラッキョウ談義を続けた。

万病に効く薬は、らっきょうである。前にもちよつと話しておいたが、らっきょうは多量の酸素を含有しておつて、心臓、肺臓、胃腸、腎臓、脚氣等かっけとうあらゆる病氣に特効がある。その上に血液を清浄にし循環をよくし、水氣をとるゆゑに水腫れの病に使用し、また利尿剤としても顕著な効能があるので、解熱剤としても、收斂剤しゅうれんざいとしても有効である。食事に際し、副食物としてとっているところ、こういう病はおの自ずから全治するものである。要するに内臓一切の病氣に効くのである。

ただし、一個の瓶は一人の専有として、他の人に食べさせてはいけないのである。その理由は、多人数によつて一瓶を食するときは、靈がこもらぬからである。(『月鏡』)

「先生、よく分かりました。梅干しも、ラッキョウも本物を選んで、お土とお松のように、信仰的に素直に頂くことですね」

「はい、それがよろしいかと思ひます」

町村は笑顔でうさず頷きながら、高村の湯飲みにお茶をつぎ足し、少し間をおいて話を続けた。

「そうだ先生、もう一つ質問してもいいですか？」

町村が何か思ひ出したように尋ねた。

宣霊合祀

「高村先生、宣霊合祀祭のことなんですが…」

町村音江が切り出した。

「はい、どんなことでしょう」

「実は、うちの支部の信者さんに先日、本部から宣霊合祀祭の案内が届いたんです。ほら、先生もご存じでしょ、かんべ神部さん」

「はい、神部信義さんのぶよしですね。確か今年の春に亡くなられたんじゃないかったですか？」
「そうなんです、四月の末でした。八十五歳でのご昇天でした。まだまだお元気だと思っていたんですけど、亡くなる半年ほど前から、急に体調を崩されてね。支部にとっても惜しい方を亡くしたと、残念に思っています」

「そうでしたか。とても信仰熱心な方でしたからね」

二人は生前の姿を思い浮かべ、しばらく思い出話で故人を偲しのんだ。

「それで、奥さんの亜紗あささんに、本部から宣霊合祀祭の案内が来たので、お参りに行かれるそうなんです」

「そうでしたか、それは良かった。神部さんも霊界でさぞ喜ばれることでしょうね」

高村が小さく頷いた。

「それで、ご長男の靖夫さんが車で連れていくことになったそうですが、亜紗さんが、靖夫さんに宣霊合祀祭のことをうまく説明できないから、私に説明してほしいって頼んでくれたんです。でね、先生に、宣霊合祀祭や宣霊社のことを、あらためてお聞きしたいんです。間違ったことをお伝えしてはいけないな……って心配していたところ、ちょうど先生がお越しになったので、基本的なことを教えていただきたいと思ってましてね」

町村は申し訳なさに言った。

「そういうことですか、お安い御用です。では…」

高村が居住まいを正した。

「ところで、神部さんのご長男は、亀岡に行かれたことはありませんか？」

「はい、ご両親と一緒に何度か行かれていますですよ」

「じゃあ、宣霊社が天恩郷にあること自体はご存じですね」

「たぶん、知っておられると思います」

「それなら良かった。宣霊社の姿をご存じなら、町村さんが説明をされても、イメージしやすいでしょうからね」

「なるほど」

町村が頷いた。

「ご承知のように、宣霊社は、万祥殿での朝夕拝の後、神苑巡拝の最後にお参りするところですね」

高村が町村に問い掛けた。

「はい、巡拝では“天津祝詞”を奏上し、ご神号奉称はなくて、“かなながらたまちはえ惟神霊幸倍ませ”を奏上します」

「そうですね。では、そもそも宣霊社には誰をまつ祀つてあるかということですが、町村さん、ご存じですよね」

「はい、この世で宣伝使を拜命していた大本の信者さんたちです」

「そうですね。教御祖おしえみおやさま方をはじめ、現界で宣伝使を拜命していた先人の方々が合祀されています。この場合、宣伝使の階級…正宣伝使、准宣伝使、宣伝使試補の区別なく、平等にお祀りされています。それで、これまでに合祀された宣伝使は…、確か…」

高村は、スマホを取り出して何やら操作し、しばらくして「あった」と言いながら、話を続けた。

「ちょうど、先日調べたところだったんですが、これまでに合祀された宣伝使は、一万三千八百六十六柱あります」

「そんなにお祀りされているんですね」

「そうなんです。そして、この一年間、つまり昨年令和二年の八月から今年の七月までに合祀された宣伝使は、百二十六柱でした」

「神部さんは、まだその中に含まれてはいないわけですね」

「そうですね。神部さん宅にご案内が届いていたということは、次の『宣霊合祀祭』で合祀していただけるわけですね。本部では、毎月十四日の午後二時からが宣霊合祀祭と決められています。

宣伝使拜命者は通常、ご昇天後、綾部の祖霊社とご自宅の祖霊舎での五十日合祀祭を経て天界にお入りになった後、さらに五十日、つまりご昇天から百日たった次の十四日が該当日になるんです」

「そうなんです。ということは…」

町村はしばらく考えてから訊いた。

「亡くなつてから百一日目に合祀される方もあれば、百三十一日目の宣伝使もあるということですね」

「そうなんです。合祀日が決まっているものですから、一日の差で合祀が一カ月ずれてしまうことはありますね。その上で、大神さまのお許しと教主さまのご裁可をいただかれて、『靈国の天使』、『瑞の靈魂の大神さまのみ使い』として、靈界で大活動を始められることになるのです。」

あの世の中でも特に天界には、天国と靈国とがありますが、靈国の天人、エンゼルである宣靈は、神さまの命により、天国だけでなく、地獄にまで行かれて救いのご用をお務めになるそうです」

「靈界で、幅広い活動をされるということですね。そういうことだと、…私、靈界でご用ができるかなあ？ 自信ないなあ」

「大丈夫ですよ、身魂相応のご用をさせていただきますから。…というか町村さん、靈界行きは、まだまだ先の話じゃないですか」

高村が笑顔で言った。

「さあ、どうでしょうね」

町村が苦笑した。

「それにね町村さん、この世の宣伝使が神さまのお道を広めるため宣伝のご用に出掛けるときには、その土地に因縁のある宣霊が、霊界から現界の宣伝使のお手伝いをされるということなのです。現界と霊界からの両方で力を合わせて、大きなご神徳を發揮させていただけると教えられています」

「それは心強いことですな」

「はい、とてもありがたいことです。それだけに、天恩郷に参拝した宣伝使は、必ず宣霊社に参拝しなければならないとご教示されています」

「私も聖地へお参りに行ったら、必ず巡拝して宣霊社に参拝しています。宣霊社には、私の両親と亡くなった夫もお祀りしていただいていますしね」

「お身内の方がお祀りされていると、おのずと身近に感じますよね」

「人間心かもしれません、遺族にとつてはととてもありがたいことだと思います」

町村が笑顔で言った。

「私たち本部の宣伝使も、聖地から地方機関へ宣伝出向するときには、必ず万祥殿で

のお礼拝と神苑巡拝を行っています。月の輪台では、瑞霊のご守護をお願いし、宣霊社では、出向先にゆかりのある霊国の宣伝使と共に活動できることを願って出向きます。例えば、長野へ出向するときは、長野にゆかりある宣霊の皆さまのご守護をお願いして出発します。昨日もそのようにしてきました。

そして、ご用を終えて亀岡へ帰苑したら、出発前と同じように万祥殿礼拝と巡拝を行い、宣霊に報告と御礼を申し上げるんですよ」

「そういうふうになさっているんですね」

町村が感心した表情で言った。

「ですから、宣霊社にお祀りされたご先祖は、『祖霊』として参拝するのではなく、瑞の靈魂の大神さまのお使いの『エンゼル』としてご活躍になっている『宣霊』ということで、神さまと同じように四拍手をしてお礼拝するわけですね」

「神さまと同じようにとは、大変な栄誉じゃないですか。四拍手でお参りすることは、そういう意味があるんですね」

「そうですね、とても恐れ多いことであり、大変ありがたいことです。ですから、それに^{こた}えらるる働きをしなければいけませんし、私たちもこの世でしっかりご用にお仕えて、その資格をいただいておかないといけないわけです」

「それは重大な責任ですね」

『霊界物語』第十四巻の巻末に、このようなお歌があります。

言行心一致せざれば地の上の

宣伝使のわざつとまらざるべし

私はこのお歌を思い出すたびに、身が引き締まるんです」

「ん、厳しいですね」

「町村さん、お互いに頑張りましょう」

「はい」

町村は小さく頷いた。

「そうそう町村さん、ご存じかと思いますが、今年の夏から“宣霊社臨時祭”という祭典が新設されたんですよ」

「七月号の『大本』誌に案内がありましたね。まだ詳しく読んでないんですけど…」

「そうでしたか。宣霊合祀祭の日が毎月十四日と固定されているので、平日だとどうしても参拝できない方もあると思うんです。また、昨年からコロナ禍で、やはり参拝を控えるご遺族もおられます。ですから、ご都合に応じて随時、宣霊社でご指名さ

れた宣霊に対して、正式参拝いただけるようになったものです」

「例えば、私の両親と夫の祭典をお願いできるということですね」

「そうなんです。お身内の方はもちろん、併せて身近だった宣霊の方のお祭りも申し込んでいただけます。祭典執行日もご希望に応じています」

「もちろん、本部の祭典や行事と重ならない日がいいんですよ」

「はい、そうお願いしています。開始時間も、午前は十時、十一時、午後は一時、二時のいずれかで希望を申し出ていただけることになっているんですよ」

「それもありがたいご配慮ですね。いずれお願いしたいですね」

「はい、その時はぜひ！」

高村は、七月号の『大本』誌の中に「宣霊社臨時祭申込書」があることも案内した。

「ありがとうございました。今伺ったことを神部さんにお伝えします」

町村は礼を言ってから、少し身を乗り出した。

「先生もう一つ、宣霊社に関連して、ずっと思っていたことを質問してもいいですか？」

「はい、何でしょう」

「実は鳥居のこと…、なんです」

町村は、言葉に力を込めて高村に訊いた。

黒木鳥居と御杖代

「天恩郷の宣霊社の前には、鳥居がありますよね」

町村音江が訊いた。

「はい、黒木の鳥居ですね。両聖地で鳥居があるのは唯一、宣霊社の前だけです」

高村浩一が頷きながら答えた。

「ですよ。私、前々からその理由を知りたかったんです」

「そうでしたか。では、ちよつと『深イイ話』になるかもしれませんが、ご説明しますね」

高村は一口お茶をすすり、背筋を伸ばした。

「実は第二次大本事件前の聖地には、鳥居がいくつかあったようです。記録写真によると、亀岡の月宮殿前にもありましたし、綾部の神苑内、それから開祖さまの奥都城にもありました」

「昔はたくさんあったのですね」

「そのようです。日本人なら、鳥居があればそこが神社であり、神さまをお祭りしているところだと分かりますからね」

「そうですね」

「鳥居というのは、神域への目印や門、境目、あるいは結界の役目や意味があるようです。中には巨大なものや、神社のシンボリック存在の鳥居もありますね」

「ドラマでよく登場する、京都の平安神宮の朱塗りの鳥居も大きいですよ」

「はい、確かに大きいですが、日本のベストファイブには入らないようです」

「そうなんですか？」

町村は不思議そうに言った。

「何といっても大きいのは、和歌山の熊野本宮大社の大鳥居で、確か高さは三十四メートルほどあります。本宮大社から五百メートルくらい離れた熊野川の畔ほとりの大斎原おおゆめはらという旧社地に立っていて、とにかく大きいんですよ。初めて見た時は、びっくりしましたね」

「そんなに大きいんですか。一度見てみたいですね」

「この大斎原という場所は、熊野川と音無川おとなしが合流する中州で、昔はそこに熊野本宮大社があったんです。ところが明治時代の大水害で社殿の多くが流出したそうです。それで、かろうじて水害を免れた社殿を現在の場所に遷座したということです。で、

元の場所を大斎原といい、現在はそこに石造りの小さい祠ほこらと、巨大な鳥居が立てられているんです」

「そうなんですね」

「ちなみに、昭和六十年の秋でしたか、その大斎原を斎場に、当時の和歌山主会主催で『紀州熊野本宮大本歌祭』が開催される予定でした。でも当日、特設舞台の準備が終わった後、降り出した雨のために、近くの屋内ホールに場所を移して行われたことがあるんですよ」

「そんなことがあったのですね」

「和歌山の熊野は、『霊界物語』第二十三巻の舞台として登場するゆかりの地でもありますし。アッ、すみません、つい話が脱線してしまいました」

「いえいえ」

高村が話を戻した。

「鳥居の話…ですが、そもそもどうして『鳥居』と言うかは諸説あり、正確には分かっていないようですね。で、語源に関しては『神さまのお使いである鳥が止まって居るところ』だからとか、人が『通り入る』からだといわれています」

「なるほどね」

「それから鳥居の形ですが、大きく二種類に分けられます。このように……」

高村はメモ用紙に簡単な鳥居の形を描き、それを見せながら説明を続けた。

「二本の柱の上に真つすぐな木材……^{かさぎ}笠木を載せて、その下、柱と柱の間にもう一本の材……^{ぬき}貫を渡して強度を増したシンプルで直線的な形のを、^{しんめい}神明鳥居」と言います。伊勢神宮などにある歴史的に古いタイプの鳥居で、宣霊社の鳥居もこの形です。

もう一つは、^{みょうじん}「明神鳥居」と言つて、二本の柱の上に載つた笠木の両端が上に向かつて反っているのが特徴です。さっきの話で出た平安神宮や熊野本宮大社の鳥居はこちらの形ですね」

「なるほど。ところで、宣霊社の鳥居は事件前からあつたのですか？」

町村が尋ねた。

「いえ、宣霊社の鳥居が建てられたのは、確か昭和三十五年の暮れ、三代教主さまのご意向で建てられたと記録されています。これは皮を剥ぎ加工した^{しらき}白木を使う、^{しらき}白木鳥居」に対し、クヌギの原木を樹皮付きのまま組んだ「黒木鳥居」と言われるものです。

鳥居の基本形で、日本で最も古い形だということです」

「白木に対して、黒木ということですね。でも、原木のままだと傷みも早くないですか？」

「そうですね。ですから宣霊社の黒木の鳥居は、すでに何度か建て替えられています。今の鳥居が建てられたのは、平成二十八年の夏でしたから、五年前ですね。長生殿ご造営や神教殿の建設に携わった京都の奥谷組によって設置されました。

当時はクヌギ材の調達が大変だったそうです。以前は本部職員の大工さんが中心になって、自前で作っていたのですが、今は真つすぐなクヌギを見つけることが困難なようです。五年前は岡山県の山中で探し出したということでした。それに生木ですから、とにかく重いんです。設置作業も技術が必要だということでしたね」

「材料としても貴重なものですね」

「そうですね。大本とご縁のある丹後の元伊勢の外宮・豊受大神社にもありますが、あちらは確かスギの原木のようでした。宣霊社のように、クヌギの原木をそのまま使った黒木鳥居は、全国でも珍しいと思います」

高村が力を込めて言った。

「だからこそ、三代教主さまが黒木鳥居を建てられたご意向が知りたかったのです。以前、京都の神社に倣って建てられたという説明を聞いたことがあるんですが…」

「はい、京都の嵯峨野にある野宮神社のみやの黒木鳥居を参考に建てられたというのを聞いています。そのご真意については、明確な記録がないので、ここからは私の推察になります。いいですか？」

「はい、もちろんです」

「そもそもなぜ野宮神社か、ということですが、町村さんは野宮神社のことをご存じですか？」

「いえ、まったく知りません」

「分かりました。では順を追ってご説明します」

「お願いします」

「野宮神社の主祭神は、天照皇大神さまで、皇室の祖神、天系の神さまで伊勢神宮でお祭りされている神さまで。で、野宮神社は、昔のある施設の跡地に建てられたものです。それが『野宮』と呼ばれていました」

「野宮？」

「平安時代、天皇の代が替わることに天皇に代わって伊勢神宮の神さまに仕える未婚の皇女がありました。占いで選ばれた女性には「齋王」と呼ばれ、京の都から伊勢に移り住みました。その齋王が暮らす場所が「齋宮」という一大都市で、「いつきのみや」とも呼ばれ、今の三重県の明和町、…伊勢神宮から二十キロメートルほど離れたところにありました。今、明和町には齋宮歴史博物館など、齋宮に関する施設が数多くあるんですよ」

「あら、行ってみたいですね」

「齋宮候補の皇女というのは、皇族の中のお姫さまですが、当時は平均して十二歳から十三歳だったそうです。最年少が二歳で、最年長でも二十八歳だったそうですね」

「それで、一生お仕えするんですか？ 大変なお役だったんですね」

「基本、そういうことです。で、齋王に選ばれた皇女は、天皇の代が替わるまで都に居ることなく、遠く離れた齋宮で、伊勢の神さまにお仕えしなくてはならなかったんですね。」

そして齋王に選ばれた皇女は、伊勢の齋宮に向かう前に、身を清めなくてはなりませんでした。まず宮中の「初齋院」というところで一年間、そして、洛外の清らかな場所を選んでさらに一年間、潔齋を行っただけです。

平安時代の初めから、その場所には嵯峨野の清浄地が選ばれていました。天皇の即位ごとに定められ、そこに齋王の潔斎のための仮の宮が建てられたわけです。それを「野宮」と呼んだのですね」

「潔斎をする場所が野宮ですか」

「はい、野宮は「黒木鳥居」と「小柴垣」に囲まれ、俗界と隔離された神聖な場所でした。そこで、一年かけて身を清め、神さまや天皇の杖代わりとなつてご奉仕する「御杖代」となられたのです。この制度自体は奈良時代にルーツがあつて、鎌倉時代まで六百六十年間続いたのですが、その後途絶えてしまいました。その間、六十四人の齋王があつたそうです。

野宮神社は、その野宮の跡に神社として存続してきた社なんです。野宮は『源氏物語』にも登場しますし、能の中にも「野宮」という曲があります」

「三代教主さまは、そうしたゆかりの地をお好みになつていたのでしょいか」
「そうですね。実際に野宮神社にも足を運んでおられますね。」

三代教主さまは、宣霊社を野宮のいわれと重ねられ、その証として黒木鳥居をお建てになつたのではないでしょうか。そして、齋王が「御杖代」として身を清め神さ

まにお仕えたように、天界の大本の宣伝使が救世の神である瑞靈大神さまの“御杖代”としてお仕えてほしいとの願いを込められたのではないかと、合わせて現界の宣伝使は、宣霊社の黒木鳥居をくぐって参拝する時に、斎王のような覚悟を持ってほしいと願われたのではないかと、私は思っています。

だからこそ宣霊社は、瑞靈大神さまをおまつりする“月の輪台”がある月照山のすぐ脇に位置しているのだと思います」

町村は無言で何度も頷いた。

「そうそう、今の野宮神社の黒木鳥居もクヌギの原木で作られていて、宣霊社のよりはだいぶ大きいのですが、あちらは表面を樹脂で防腐加工してあるんです」
「え、そうなんですか。宣霊社の鳥居は、三代教主さまの心を体した、純粹で意味深い黒木鳥居ということですね。高村先生、よく分かりました。やっとスッキリしました」

町村は満足げな面持ちではほ笑んだ。

(続く)

受けた恩

今年は十月に入っても、日中はしばらく気温の高い日が続いたが、十一月になると寒さが駆け足でやってきた。長野市内の初雪も平年より数日早く観測された。

早朝、部屋のカーテンを開けると、いつもの見慣れた風景に、うつすらと雪化粧が施されていた。

「蒼汰朗、ほら、見てごらん」

大地は寝起きの蒼汰朗を抱きかかえて窓の外に目をやった。

寝ぼけ眼だった蒼汰朗も、いつもと違う景色に気付き、目を丸くして窓外を指さした。

「わあゝ真つ白、雪だるま作れるかな？」

かわるき
芳が訊いた。

「んゝ、どうかな。後で外に出てみようね」

大地が蒼汰朗の頭をなでながら言った。

昼を過ぎると、表の雪はすっかり溶けていた。かろうじて作れた小さな雪だるまも、雨宮家の玄関先で“汗”をかいていた。

「かわいい雪だるまにお出迎えしていただきました」

同じ中学校で教鞭きょうべんを執る東順子あずま じゆんこは、大地の後輩。今日は授業の持ち方の相談で、雨宮家を訪ねてきた。

「休日にすみません、お時間いただいて」

「いや、お役に立てるか分からないけど……」

大地が出迎えると芳が遅れて出てきた。

「いつも夫がお世話になっております。さあ、どうぞお上がってください」

「ありがとうございます。ちよつとだけお邪魔します。あゝ、蒼汰朗君、こんにちは」

東は芳の後ろに隠れていた蒼汰朗に声を掛けた。

「蒼汰朗君、あの雪だるま、作ったの？」

東が腰をかがめて蒼汰朗に声を掛けた。

蒼汰朗は恥ずかしそうに笑顔で頷うなずいた。

「もう終わりましたか？」

芳は二人に声を掛けた。

「うん、打ち合わせはほぼ終わったよ」

「じゃあ、休憩してください」

芳は二人の湯飲みを引き、テーブルの上にコーヒートケーキを運んだ。

「うわー、おいしそうなモンブラン。あつ、でもまた太らないかしら」

「じゃあ、やめとく？」

大地が茶化した。

「いえ、大丈夫です、覚悟して頂きます」

東が相好を崩しながら言った。

「あのおー、この言葉、いいですね。施した恩は忘れてしまえ。受けた恩は忘れるな」。

…その通りだなあ」

東がサイドボードの上にある日めくりの『大本み教えカレンダー・こころの鏡』を見ながら、しみじみと言った。

「東先生は、この言葉…、お好きですか？」

芳が訊いた。

「はい、実は私の地元では、この言葉を実践した先人たちがいたんです。その人たちは、私たちの誇りでもあるんです」

「そうなんですか、それって、いったいどんなことですか？」

「お話ししてもいいですか？」

「ぜひ、聞かせてください」

芳が答え、大地も頷いた。
うなず

では…、と前置きして、東が語り始めた。

「芳さん、イライラ戦争つてご存じですか？」

「イライラ…戦争？」

芳が首をかしげた。

「正確には、イラン・イラク戦争です。第一次湾岸戦争とも言われた、中東のイランとイラクの間で起こった戦争なんです」

「それなら聞いたことあるけど…」

「一九八〇年（昭和五十五）から八年間も続いたので、なかなか終わらない戦争に対して、両国の名前をもじって、日本ではイライラ戦争とも呼ばれたようなんです」

「なるほど、そういうことですか」

「その戦争の最中に起こった出来事なのですが…」

東は戦時下でのある出来事をかいつまんで説明した。

イラン・イラク戦争は、開戦から五年後の一九八五年の三月に入ると情勢が一気に悪化。イラン国内で日本人が多く住んでいた地域も空爆されるようになった。

そして三月十七日、イラクのサダム・フセイン大統領が「四十八時間の猶予期限以降、イラン上空を飛ぶ航空機は民間機であっても、無差別に攻撃する」と宣言した。これを受け、イラン在住の外国人は一樣に命の危険を感じ、一斉に国外に脱出。当時、多くの日本人も出国を試みたが、各国の航空会社は自国民を優先して搭乗させていたため、日本人はチケットを持っていても飛行機に乗ることができず、イランを出国できない状況となっていた。

現地の日本大使館からは日本政府に対して、民間航空機派遣の要請がなされたが、乗務員の安全が確保できないなどの理由から見送られていた。三月十九日、二百人あまりの日本人は、テヘランのメヘラバード空港に取り残され、望みを絶たれた彼らは絶望的な気持ちに包まれていた。

そこに救いの手を差し伸べてくれたのがトルコ共和国だった。二機のトルコ航空機が空港に降り立ち、タイムリミット直前で、日本人全員を救出し、トルコまで送り届

けてくれたのだ。

当時、テヘランには多くのトルコ人も住んでいて、約六百人のトルコ人が空港で待機していた。だが、彼らは航空機一機を日本人に譲り、多くは陸路で避難をしてくれたのだった。

「…でも、トルコ政府が日本人のために、どうしてそこまでしてくれたのか、日本政府もマスコミもまったく分からずにいたんですね。すると後日、駐日トルコ大使からコメントが発表されたんです。『私たちはエルトゥールル号の借りを返しただけです』と…」

東が力を込めて言った。

「エ、エルトゥールル号…?」

芳が確かめるように復唱した。

「ご存じ不是吗?」

「ええ、でも奇跡的なお話ですね」

芳がうなずきながら言った。

「僕は聞いたことあるなあ。確か昔、和歌山であつたトルコ船の海難事故じゃなかつ

た？ あつ、そういえば、東先生は和歌山出身だったよね」

「さすが先輩！ 私は本州最南端の串本くしもと町生まれです。で、その事故が起きたのが、串本の紀伊大島という島の沖合だったんです…」

東は「エルトゥール号海難事故」について、熱く語り始めた。

今から百三十年以上前の話である。

一八八七年（明治二十）、小松宮彰仁親王殿下・同妃殿下一行が、イスタンブールを訪問したことの答礼として、当時のオスマン・トルコ帝国は、軍艦エルトゥール号を使って、日本への初の親善使節団・六百五十人余を派遣することになった。

使節団は一八八九年（明治二十二）七月十四日、イスタンブールを出港したが、エルトゥール号はこの時すでに建造後二十六年を経た木造の老朽艦だったため、長期の航海に耐えうるか疑問視されていた。

幸いにも翌一八九〇年（明治二十三）六月七日、予定より遅れ、十一カ月の船旅の末、なんとか横浜港に入港。一行は国賓として熱烈な歓迎を受け、明治天皇にも謁見した。三カ月後の九月十五日、使節団は台風が接近しているにもかかわらず横浜港を出港し、帰路に就いた。しかし翌十六日夜、エルトゥール号は台風の直撃を受け、現在

の和歌山県串本町の檜野^{かし}埼^{のさき}沖で座礁。あえなく大破し沈没してしまった。この事故で、荒れ狂う海に投げ出された乗組員のうち、五百八十七人が命を落とす大惨事となった。

この時、島民たちは荒れる岩場の河岸^{かし}から生存していた乗組員を総出で救助。負傷した六十九人の看護に不眠不休で尽力し、非常用食料や自らの衣服を惜しげもなく提供した。島民の真心を尽くした献身的な姿は、言葉の通じないトルコ人たちの心を打った。

翌年一月、日本の軍艦二隻で無事祖国まで送られたトルコ人たちは、この大恩を忘れることなく、子に、そして孫にと、この史実を語り継いできた。小学校の授業でも教えられていて、トルコ人なら知らない人はいないという実話である。トルコが親日国である理由もここに端を発しているのである。

「串本で生まれた私は、エルトゥールル号事件を学校で教わっていましたし、祖母からも聞いていました。祖母もまた先人から伝え聞いていたようです。でも島民たちは、そのことを自慢するようなことはしなかったそうです。祖母は時々、＼人にしてもらったことは忘れてはいけないよ、でも、人にしたことは忘れなさい」と言っていました」
「だから、この言葉が心に響いたんだね」

大地がカレンダーを見ながら言った。

「そうなんです。事故の後、トルコからの『治療費の請求をするように』との連絡に対しても、島民たちは『はじめから請求するつもりはない。そんなお金があるなら遭難者の義援金に充ててください』と断ったそうです。この大事故は、その後日本ではあまり知られることはなかったのですが、九十五年がたって、広く認知されることになったんです」

東が言葉に力を込めた。

「なるほど、それがトルコによるイランからの日本人救出劇だったわけですね」

「はい、私たちの先人が取った善意の行動が時を越えて、多くの日本人を救うことにつながったんです。当時救出された日本人が、航空機のキャビンアテンダントに、『いつ爆撃されるかも分からないのに、よく助けに来てくださいました』とお礼を言うのと、そのアテンダントは『昔、トルコ人は日本人に助けられました。日本人を助けるために、この仕事に携われたことを私たちは誇りに思います』と胸を張っていたそうです」

「なんと、感動的なお話ですね」

芳はしみじみと言った。

「この二つの実話は六年前（二〇一五年）に日本・トルコ合作の『海難1890』と

「いう映画にもなっているんですよ。雨宮先生、これはお勧めですよ」

「そんな映画があるんだね。ぜひ見てみたいな。それにしても、トルコの人たちは、素晴らしい国民だね」

大地はそう言って、日めぐりカレンダーに目をやり、もう一度、尊師さまのお示しをかみしめるように言葉に出した。

施した恩は忘れてしまえ。

受けた恩は忘れるな。

ありがたく働く

来客で少し興奮していたのか、東順子が帰ったあと、蒼汰朗^{そうたろう}はほどなく昼寝に入った。大地が蒼汰朗を寝かしつけている間に、芳^{かおる}はコーヒークップなどを片付け、台所で洗い物をし、終わると二人はリビングに戻った。

「東先生って、感じの良い人ね」

芳が言った。

「だろう。それに今日はイイ話も聞かせてもらったしね」

「日めくりカレンダーのお示しから、思いがけない話を聞けて、とても勉強になったわ」

リビングにある「大本み教えカレンダー・こころの鏡」は、教主さまご就任十周年の記念品である。大地が最初に見たのは、実家で、母・京子の綾部の実家から送られてきたものだった。

大地が初めて見た日の日付が「一日」で、そこにあつた出口日出麿尊師さまのお示しが印象的であつた。大地はカレンダーを手にして「一日」をめくった。

どんな場合でも

「ありがたい」と思う心

これは神に近づく

第一歩である

大地はその時、京子に「一行目がポイントだね」と言ったことを思い出し、当時感じたことを芳に話した。

「誰が見てもありがたい場面や状況なら、普通に『ありがたいなあ』、って思えるよね。でも、『どんな場合でも』、っていうことは、ものすごくつらく苦しいときにも…、ってことだろ。死にそうなときでも、『ありがたい』と思うことはなかなかできないよ。少なくとも今の僕には無理。芳はどう？」

「私も同じよ。ちよつと難しいかな。でも、このカレンダーがここにあつて良かったね」大地宅のカレンダーは、二人が結婚した時、芳が持参したものだった。

「これ、前から欲しかったんだけど、芳が持ってきてくれてうれしかったなあ」

「たまたま実家に使つてないのがあつたから、持ってきてきちゃった。これ、毎日お示しに触れられるからイイよね。ホントはご神書を拝読すればいいんだけど、この短いフ

レーズが、スーッと心に入ってくる感じで、まさに「この鏡だよね」

「確かに！」

芳は大地の手からカレンダーを受け取り、私は…と言いながら「六日」をめくった。

生きるために働くのじゃない

生きているから働くのだ

「これが好き。…っていうか、意味が深いなあって思うのよね。私の浅い解釈だけど、どうしても食べるために働いているというスタンスになるのが一般的でしょ。でも、そうじゃない、生きている…もつと言うと、生かされている…その感謝の思いで働かせていただくんだ、ということなのよね」

芳が大地に確かめるように言った。

「そうだね。まあ、大変なときもあるけど、働けること自体がありがたいことなんだよね。働くって、端が楽になる、自分の周辺の人が楽になることだって言うしね」

「ハタ、ラク…、それ、私も大道場修行を受講した時に教えていただいたわ。そのころ私、職場のことで悩んでいて、大道場の坂口さんに相談したら、このカレンダーのお示し

を見せてもらったのよ。それから、労働について『靈界物語』に書いてあるから読んでごらんって教えていただいたの。それで拝読してから、何だか気持ちが楽になったことがあったのよ」

物語の中では、登場人物の何げない会話の中に、深い真理が込められていることが随所にある。

芳が坂口満に薦められたのは、『靈界物語』第四十六卷だった。その一場面では、三五教の万公と五三公が、労働について語っている。

場面はウラナイ教の本山、小北山での一騒動の後、松彦、松姫、お寅婆さま、魔我彦、蠟蠟別ら九人が、慰労会をやっている中での二人の会話である。

万公『ア、ア、エライ労働をやったものだ。よほど報酬を請求しなくちや、バランスが取れない。御苦勞さまだったくらいな報酬では、ねっから有難くないからな。夜業までさされて、幾分かの割増しをもらったて、やりきれないワ』

五三『オイ万公、労働は神聖だ。おれだって労働は貴様と同様にやったのだ。労働の量に相当しただけの報酬を、権利として要求するのは道德的には根拠のないものだよ。』

労働の報酬のみを以て当然の権利とみるならば、それこそ社会に弊害百出して世を混乱に導くより仕方がない。老者、病者、小児などは労働をせないからパンを与えない、といったらどうするのだ。労働させてもらうのもヤッパリ神様のおかげだよ。現代やかましく持ち上ってきた労働問題は、人類の集団もしくは階級間の問題でなくして、神様と人間との問題だ。われわれ三五教の宣伝使または信者たるものは、いかなる場合にも、永遠の真理の上に立ち、時代を超越していなければならぬ。神聖な神の道でありながら、労働問題を云々するようなことは、チツと謹まねばなるまいぞ』

『それだとて、労働は天の恵みを開拓するのだ。宣伝使だつてヤッパリ労働者でもあり、また報酬を要求する権利がなくてはやりきれないじゃないか』

『宣伝使、信者の、神より賜わる報酬というものは、信と愛と、正しき理解との歡喜の報酬を、即時に神から賜わっているじゃないか。たとえ世の中の物質生産の労働に従事し、相当の報酬を得るのを、今の人間は自分が儲けるのだといっているが、決して儲けるのではない、神から与えられるのだ。おかげを頂くのだ。自分が儲けるなんて思ったら大変な間違いだ。人間というものは、自分から生きるこたア出来ない。許されて生きているのだ。それだから、人はパンのみにて生くるものに非ず、と神がおつしやるのだよ。パン問題のみで、人間の生活の解決がつくのならば、世の中は殺風景

な荒野こうやのようなものだ』

『吾々われわれは、つまりいえば筋肉労働者きんにくろうどうしやだ。ジツとしていて、口の先くちやペンを使つかっているような屋内労働者おくないろうどうしやとは、苦痛くつうの点てんにおいて天地霄壤てんちしょうじょうの差さがあるのだからなア』

『そりや実に浅見せんけんだ。筋肉労働者きんにくろうどうしやは、人体自然じんたいしぜんの道理どうりに従したがって活動かつどうするのだから、たとえ汗あせを流ながしても愉快ゆかいなものだ。苦しいといつても宵よいの口くちだよ。ペンを持もって著述ちよじゆつをしたり、椅子いすに掛かって調査ちやうさなどをやったりしている者ものの労働ろうどうの苦しみといつたら、筋肉労働者きんにくろうどうしやの夢想むそうだも及およばざるところだ。すべて人間にんげんというものは、人のやつていることが善く見えるものでなア、誰だれだつてその局きよくに當あたつてみよ、ずいぶん苦しいものだよ。上うへになるほど責任せきにんも重く、單純たんじゆんな筋肉労働者きんにくろうどうしやの比ひではない。私も一度は青表紙あおびょうしと首くびつびきをして、たくさんの参考書さんこうしよをあさり、著述ちよじゆつに従事じゆうじしたこともある。また土工どこうにもなり、百姓ひやくしやうにもなり、車力しやりきにもなつたが、ヤッパリ筆ふでを持もつ御用ごようが一番樂いちばんらくそうに見え一いち番苦ばんくるしかつたよ。靈界物語れいかいものがたりの口述者こうじゆつしやだつて筆記者ひつきしやだつて苦しいものだ。お寅婆とらばあさまの後あとを追おつかけ、息切いきぎれするような苦しい目に遭あつたといつても、体からだを休やすめ酒さけの一杯いっぱい飲めば、それで済すんでしまうものだ。著述家ちよじゆつかなんかになつてみよ、一分間いっふんかんだつて心のゆるむ隙ひまはない。夢ゆめにだつて忘わすれることが出来ないほど、心身しんしんを疲勞ひろうさせるのだ』

「拝読したところはいろんな示唆があつて、難しい部分もあつたんだけど、私は、働くということは神さまのお許しを頂いて、ありがたく働かせていただく」という感謝の心が大切なんだと教えていただいたの」

「そうなんだ」

「あのころは、自分はこんなに頑張つて働いているのになんでこうなるんだつて、不平や不満があつたのよね。今思うと、自分中心の考え方だったのかな。でも、大道場修行から帰つて、気持ちを切り替えるようにしたら、周囲もだんだん変わってきたような感じになったのよ。あの時はとても不思議だったわ」

芳がしみじみと語つた。

「そんなことがあつたのか。聖地での修行では、いろんなおかげを頂けるんだよね」
大地が芳の気持ちを労^{いたわ}るように言つた。

「さてと、おいしいお菓子を買つておいたのよ。お茶しましょ」

芳が急に話題を変え、うれしそうに言つた。

「えつ、さつきモンブランを食べたとこじゃないか」

大地が驚いた声で言った。

「い、い、の……。せつかくのお休みなんだから」

「……って、よく分からない理由だけだなあ」

「自分へのご褒美よ」

「え、何のご褒美？」

「いいじゃない。じゃあ、いらないの？」

「いや、そんなことは言っていません。慎んで頂きますよ」

大地は笑いながら応えた。

お点前^{てまえ}とまではいかないが、二人は時々、お抹茶を点^たてて頂くことがある。特段道具^{どうぐ}がそろっていないくても、お茶は、お湯と抹茶、茶碗^{ちやん}と茶筌^{せん}があれば頂ける。

元来、茶道とは無縁の大地だったが、大本の関係から、お茶を頂くことは何度かあった。特に大道場修行の最終日、綾部・梅松苑の緑寿館で頂いたお茶は、ことのほかおいしかったという記憶が残っている。

頂くのは好きだが、大地が茶筌を振ると、どうもお茶がきれいに点^たたない。悔しいが芳^たが点^たてると、細かい泡が均一になり、見るからにおいしそうに仕上がる。

大地は芳が点^たてたお茶を一口飲んだ。

「あゝ、おいしい！ ほっこりするね」

「でしょ」

芳が笑顔になった。

一所懸命

新たな年を迎え、日本では新型コロナウイルスの感染は、落ち着きを見せていた。

前年の十一月、ワクチン接種が先行していたヨーロッパでは再び感染が拡大、ロックダウンや規制強化、三回目のワクチン接種を義務付ける国もあった。また、師走の前に新たな変異株も出現し、世界は混乱の中で年を明けたのだった。

そんな情勢の中にあつて、日本での急激な新規陽性者の減少については、その理由を明確に説明できる専門家は、まだいないようであつた。

「私、思っただけだね…」

芳が話し始めた。大地は節分を前に、雨宮家の人型と型代を記入しようと、テープに用紙を準備したところだった。

「何？」

「日本だけ、コロナの感染者が減っているでしょ、不思議だよね」

「そうだね」

「どうしてだと思う？」

「さあ、専門家でもはっきりと答えられないんだから、僕に分かるはずないよ」

「だよ。で、私が思うには…、やっぱりご祈願のおかげじゃないかな。ほら、土曜日の夜に亀岡の万祥殿からオンラインで、新型コロナウイルス終息の一斉祈願をしているでしょ。かれこれ六十回以上続けているじゃない。だからみんなの祈りが神さまに通じているのよ、きつと」

芳は自信満々で言った。

「そうだね、僕もそのおかげはあると思うよ。『神言』の祓^{はら}いの言霊で清められ、大難を小難にしていただいているんだろうね。アッ、それからね…」

大地は、ちよつと待つてよ、と言いながらスマホを取り出し、あるサイトを開いた。

「あつた、これだ」

「何？」

「以前のネット記事だけだね。たまたまラジオで聞いていた話が面白かったんで、あとでチェックしたんだ。日本でのコロナ感染者が減少した要因として、日本人が細胞の中に持っているある酵素の働きが影響しているんじゃないかっていうことなんだよ」

「そんなのがあるの？」

芳が興味を示した。

「あくまで一人の医師の見解だから真偽は分らないんだけど、日本で被害が抑えられた理由は、体を守ってくれている“何か”があるからっていうんだ。それは、ヒトの細胞の中にある“アポベック”という酵素で、その働きが関係しているのではないかということなんだね。そのことは国立遺伝学研究所と新潟大学の合同研究チームから仮説が報告されているらしくて、この酵素は、アルコール分解酵素と同じように、生まれつきヒトが持っているもので、なぜか日本人にはこの酵素活性が強い人が多いんだって。当然、個体差はあるけど、ウイルスが侵入すると、ヒトの細胞は危険信号を出すんだね。するとそれに誘導されてこの酵素が活性化して、その結果、ウイルスの遺伝子にエラーを起こさせて、最後には自滅させる…っていう働きを持っているかもしれないんだって」

「ウイルスを自滅させるって、頼もしい酵素ね」

芳が目丸くした。

「もともとウイルスというのは、ヒトの誕生よりずっと前から存在していて、ヒトは、

そのウイルスがいる環境の中で誕生し、生き続けてきたんだね。特にアジア・オセアニアのヒトたちは、地理的にも環境的にも、太古から従来のコロナウイルスとたびたび遭遇して、自然感染の波をこれまでに何度も乗り越えてきた歴史があつて、その中で、この酵素の働きが培われてきたみたいだね。

ウイルスがヒトに対して毒性を強くしすぎると、ヒトの細胞が過剰に刺激されて、この酵素の活性が強まる。すると、ウイルスの遺伝子にエラーが起きて、ウイルス自身が不利になる。だからウイルスとしては、ヒトの細胞をあまり刺激しない程度に無毒化したものにとどまつて生き延びてきたんだって」

「ん、何だか難しい！」

「まあ一言でいうと、日本人にこの酵素の働きがあるために、ウイルスもヒトと折り合いをつけながら生きてきたということかな」

「じゃあ、共生してきたってこと？」

「まあ、そういうことだろうね。だからこの医師も、免疫力の高い子供たちへのワクチン接種は慎重にした方がいいという意見のようだね。基本的には、バランスの良い食事を心掛けて、適度な運動をして免疫力を高めること。清潔な衣・食・住に心を配って暮らす生活習慣によって免疫力を高めることができるって言っていたんだよ」

「あら、大本で言っていることと同じじゃない？」

「そうなんだよ。だから、僕もこの話は興味深かったんだ」

「なるほどね」

芳は何度も頷きながら、大地の話に耳を傾けた。二人はその後、最近のネットやテレビ番組の話題を持ち出して、話を続けた。

「そうそう、いつだったかな、医療系のテレビドラマでの話なんだけどね」

芳が話題を変えた。

「高校生くらいの若者でも、骨粗鬆症になることがあるって聞いて、びっくりしたのよ」

「高校生が骨粗鬆症になるの？」

「そうらしいわよ。一人の女子高生が、アイドルになりたくって、体形を保つために必死でダイエットに取り組んでいたのよね。まあ、その気持ちは、分からないでもないけど…」

「芳もそんなダイエットしたことあるの？」

大地が不思議そうに訊いた。

「アハハ、それがあるのよ。…って言うかチャレンジしたことはあるんだけど、空腹に耐えられなくて、すぐにギブアップしちゃったけどね」

「食欲に負けたってことだね」

「まあね。でね、お医者さんや技師さんたちが、無理なダイエットをやめるように説得するんだけど、なかなか意志が固くってね。それでいろんな資料を作って、無茶なダイエットをすると自分の体がどうなってしまうのか、最悪の場合は取り返しのつかないことになることを親身になって説明して、ようやく分かってもらった、というストーリーだったんだけどね」

「なるほど」

「その中で、私、初めて知ったんだけど、人間の骨というのは、だいたい高校生くらいまでに成長して、それ以降はどんなに頑張っても骨は成長しないんだって。男子で十八年、女子で十五から十六年とかで、その成長期に骨の成長を阻害するようなことをしてしまうと、もう取り返しがつかなくなるらしいのよ」

「そうだね」

「なんだ、知っていたの？」

「一応、教師ですからね」

「あつ、そうだった」

芳が小憎らしく笑った。

「でね、その番組を見ていて思い出したのが、聖師さまのお歌なの。

若き日に汗と膏あぶらをしぼらずば

筋骨弱きんこつ いのちく生命いのちみじかし

…っていうお歌があるでしょ。私が高校生のころだったかな、そのお歌を最初に聞いたときには漠然と、それはそうかも…って思った程度だったんだけどね。でも、そのドラマを見ながら、聖師さまのお歌は、医学的な裏付けもあつてのお示しだったんだなあ…ってあらためて感動して、聖師さまスゴイ！ と思ったの」

「なるほど、確かにそうだね。お互いに、筋骨弱く…ならないようにしないとね」

「骨はもう手遅れだろうから、筋力は鍛えないと駄目ね。ヨシ、一生懸命頑張ろう！」
芳が胸の前で拳を固めた。

「そうそう、その『一生懸命』だけどね」

「はい？」

「物事を必死に命懸けですることが一生懸命だよね」

「そうね」

「一生、命を懸けるって書くよね。でも元々は、一つの所に命を懸ける『一所懸命』^{いっしょけんめい}だったって、知ってた？」

「漢字の違いは知っていたけど、どっちでもいいのかなと思っていたわ」

「正しくは、一つの所の一所懸命なんだよ。というか、一所懸命から転じて、一生懸命になったんだ」

「そうなの？」

「元々は封建時代に、家臣が主君から賜った領地を生活の根拠として、生命を懸けて守ることから出た言葉なんだよ。つまり、その一つの場所に命を懸けるってことなんだ」

「へえ、そういうことなの、知らなかったなあ」

「勉強になったでしょ」

「さすが先生！」

「まあね」

大地は得意げに言った。

「じゃあ、ついでにもう一つ」

「何々？」

「昔は、その家を継ぐのはだいたい長男だったわけで、次男以下は、他家に出されたりしたんだよね。そうしてその家系の土地や建物を守ってきたんだね。でも、時代が進むと、後継者に財産を均等に分けることが良いような風潮になってきたんだ」

「そうよね、遺産相続は、子供が均等に分ける方がいいよね」

「相続人が多いと、元あった財産は、一人分としては減ってしまうよね」

「当然そうなるわよね」

「田んぼがあつたら、それも均等に分けるようになる。そうすると一人分の面積は、元の面積より小さくなる」

「…だね」

「それは代々続く家にとっては愚かなこと、馬鹿なことだと思われたんだ。田を分けるとそうなることから、馬鹿者のことを、田を分ける者と書いて、*“たわけもの”* というようになった…という語源説があるんだよ」

「へえ、初めて知ったわ」

「豆知識でした」

大地がまた得意そうに言った。

「でも今、たわけ者^{つふや}ってあまり使わないわね、時代劇……くらいかな」
芳が横を向いて呟いた。

丑から寅へ

「よし、書けた。蒼汰朗^{そうたろう}、おいで」

大地はペンを置いて、蒼汰朗の名前を書いた人型用紙を、蒼汰朗の口元に近づけた。

「蒼汰朗、ここにフゝってしてごらん。フゝ」

大地はわざと口をとがらせ、フゝと言いながら息を吹く動作を試みせた。蒼汰朗はニコニコしながらそれをまねてフゝと言ったが、声だけで息を吹いてはいなかった。

「フゝって言っているだけだね」

^{かわる}芳がほほ笑んだ。

「だね。じゃあ、もう一回。ほら、蒼汰朗、こうするんだよ」

大地は、自分の人型用紙に持ち替え、両手で口元に近づけ、息で用紙が揺れるように、大げさに息を吹きかけてみせた。

「はい、やってみようね。フゝ」

大地はもう一度、蒼汰朗の人型用紙を口元に近づけた。今度はフゝの声と共に何とか息がかかった。

「やった、蒼汰朗、上手！」

芳が拍手をすると、褒められた蒼汰朗も胸の前で手をたたいた。

「健康で暮らせますように…、かんながらたま惟神靈幸倍ち はえませ」

大地はそうつぶやきながら、人型用紙で蒼汰朗の頭や体を撫なでた。

「良くなりました。はい、こっちがお母さんのだよ」

大地は、芳の人型用紙を手渡した。

「じゃあ、私も…」

芳が同じように用紙に息をかけると、蒼汰朗が良くなりました、と言わんばかりに手をたたいた。

「蒼汰朗、ありがとう」

芳は人型用紙で自分の体を擦さするように撫なでた。

「よし、これで完璧だ」

「これ、お母さんのところへ持って行くんでしょ」

芳は大地が持つ人型用紙に目をやりながら訊きいた。

「そう、今年の節分大祭には、お母さんがお参りに行くらしいからね。今日の夕方にでも届けないとね」

「蒼汰朗、ジイジとバアバのところへ行くよ」

芳が蒼汰朗の顔をのぞき込みながら言った。

「ジイジ、バアバ、行く行く」

蒼汰朗が小躍りした。

「いらっしやい、蒼汰朗、よく来たね」

京子が玄関でしゃがみながら迎えると、蒼汰朗が勢いよく抱きついてきた。

「こんばんは」

芳に促され、蒼汰朗がかわいい声であいさつした。

「あら、言葉がはつきりしてきたね。それにまた少し大きくなったかな？」

京子が両手で、蒼汰朗の頬を包み込むようにしながら言った。

「そうなんです。おしゃべりが上手になりました」

芳が言った。

「お邪魔します」

三人は京子の後についてリビングに入った。

「お母さん、これ、人型をお願いします。少しでもお玉串も入っているのです…」

「はい、預かります」

大地が人型・型代用紙とお玉串が入った封筒を京子に手渡した。

「久しぶりにおじいちゃんとおばあちゃんにも会えるね」

「そうね、コロナの影響で二年近く会ってないかな。でもね、今年の春ごろには、温泉に入り二人でこっちに來たいって言っているのよ」

「そうなんですか」

芳が聞き返した。

「そうなの。実はコロナ騒動の前にね、動けるうちに旅行もしたいって言っていたのよ。でも、この二年間は無理だったでしょ。でね、今年の春だったら行けるんじゃないかって期待しているようなの」

京子が笑顔で言った。

「来ていただけたら嬉しいですよ。蒼汰朗にも会っていただきたいですしね」

「そうなのよね、かわいいひ孫だからね。そのためにも、節分大祭でしっかりコロナの終息をご祈願してこないとね」

「くれぐれも、お願いします」

大地が軽く頭を下げながら言った。

「おう、いらっしやい。蒼汰朗、よく来たね」

大地の父・剛^{たけし}がリビングに入ってきて、蒼汰朗を抱き上げた。

「ちよつと重くなつたかな？」

「蒼汰朗、誰かな？」

「ジイジ」

大地の問い掛けに、蒼汰朗は小さな声で照れくさそうに言った。

「そうだよ、ジイジだよ」

剛は好々爺の顔になった。孫のかわいいしぐさには、無条件で笑顔になれる不思議なパワーがある。

「ところで今日は何？」

「人型を持つてきたんだ」

「そうか、節分には母さんが綾部に行くからな」

「お父さんは留守番？」

大地が訊^きいた。

「一緒に行きたかったけど、都合がつかなかったんで、今回は母さん一人で行くこと

になったんだ」

剛はまだ大本信徒になってはいないが、大本に対して理解があり、今回も快く送り出してくれることになったという。

数日前、京子が里帰りを兼ねて、大本の節分大祭に行きたいと言い出した時である。京子は夕食時に話を切り出した。おそらく、行ってきたらいいよ、と剛が同意してくれることは分かっていたが、より気持ちよく送り出してもらいたいと、京子が伝えたことがあった。

「あのね、今年、令和四年はね、大本の神さまにとって、とてもご縁が深い年なのよね」「ご縁が深いって、どういうこと？」

「去年、令和三年は丑年だったでしょ」

剛が頷いた。

「で、今年が寅年でしょ。だから去年から今年で、丑と寅をまたいで丑から寅へ…、丑寅になるでしょ」

「そうだね」

「丑寅は、方位でいうと東北の方角で、大本でお祭りしている『良の金神』の良なのよね。

大本にとって節分がお正月で、節分大祭は立春へと年をまたぐことになるでしょ。だから縁が深くて、ありがたいのよ」

「なるほど、そうか。確か大本の開祖さまに最初に懸かった神さまが良の金神という名前だったな」

「あら、覚えていたのね」

京子はちよつと驚いた口調で言った。

「まあ、それくらいはな。だから今年はおめでたいっていうわけだ」

「そういうことなの。十二年に一回巡ってくる縁が深い節分なの。だから、ありがたい神さまにお参りさせていただきたいのよね」

「じゃあ、しつかりお参りしてきたらいいんじゃない」

「はい、ありがとうございます」

ということ、剛は快く同意してくれたのだという。

国祖・良の金神のご退隱やご出現のことなど、教義的なことを説明するより、剛にはより身近な話題として、今年の節分のことを伝えた方が良いのでは、と思った京子の話であつた。

「なるほど、そういうことだったのか。やるね、お母さん」

大地が小声で言った。側そばで聞いていた芳も、十二支を例に出した面白い話だと感心した。

「実はね…」

京子が大地の耳元でささやいた。

「これ、おじいちゃんからの受け売りなのよ。なんでもラジオの番組で今年のラッキー神社として広島県にある神社が、開運あやかり神社の一つだつて紹介されてたらしいのね。その神社の名前が、うしろじんじや「艮神社」つて言うんだつて。」

「へえ、そんな神社があるんだね」

「私も知らなかったんだけど艮神社つて、広島県内おのまちで尾道市と福山市にあつて、そのラジオで紹介されていたのは、福山にある艮神社だったのね。」

何でも元は福山城の鬼門を守っていた神社だったらしいの。創建は平安時代で、江戸時代に入って福山城が築城された時に城郭の鬼門を鎮める守護神とされたようなのね。艮神社という名前は明治に入ってから付けられたみたいよ。しかも厄除よけ神、疫病封じの神さまとして祭つてあるつていうことらしいのね。だから今のコロナのご時

勢で年をまたぐお正月にお参りするには、ピッタリじゃないかということで、初詣におすめの神社として挙げられていたんだって」

「なるほどね」

「でもね、おじいちゃんは、だったら良の金神をお祭りしている大本の方が、よりラッキースポットじゃないか……って思ったんだって。私も同意見。でも、面白い話だとも思ったのよ」

京子が話の出どころを説明した。

「確かに、そうだね」

大地は何度も頷いた。

「でも、お母さん、疫病封じの神さまってどんな神さまなんだろうね」

「そうなの、私も気になって、良神社のことをネットで調べてみたらね、ご祭神は須佐之男命すさのおのと伊邪那岐命いざなだったのよね」

「そういうことか。一般では、須佐之男命は人々を疫病から救った神さまとして崇敬されていることがあるからだろうね」

「そうみたいね。でも私は、大本の節分大祭で、世界平和に併せて、コロナ終息もお

祈りしてくるからね」

京子が力を込めて言った。大地は頼もしい母だと、笑顔で頷いた。うなず

二月三日、午後十一時五十分を過ぎ、まもなく四日・立春を迎えようとしたいた。京子は大勢の参拝者の中に混じって、父・梅木松太郎と並び、雪が舞い始めた綾部大橋のたもとに立っていた。

…親子でこの場所に立つのは、いつ以来だろうか。

京子は、心の底から自然と湧いてくる喜びをかみしめていた。

節分の伝統

ふと、昔のことが思い出された。

…あれはいつごろだったかな？

京子は梅木家の長女として綾部で生まれ育った。高校生だったから、かれこれ四十年以上も前になる。梅松苑にはまだ長生殿は建っておらず、みろく殿での節分大祭だった。殿内には囲炉裏もあり、炭で暖を取っていた時代だ。当時は雪の中での節分も多かったが、それでも七百八十九畳敷きの拝殿は、全国から集まった大勢の参拝者の熱気であふれていた。

京子は、物心ついたところから両親に連れられて、たびたび梅松苑に足を運び、祭典や霊祭に参拝していた。子供のころは夜を徹しての祭典には耐えられなかったが、高校生になったころには、徹夜することが若者のステータスのように思えて、友人と夜を明かした記憶がある。

節分の夜、祭典中に遅れて満堂のみろく殿に入ったことがあった。その時、殿内の荘厳な雰囲気と拝殿から伝わってくる何とも言えない迫力に圧倒されたことを覚えて

いる。

…あの時は、感動したわねえ。

それから比べると、今年のコロナ禍の節分大祭は、長生殿内の人数が制限されていることもあり、少し寂しい気持ちになった。

それでも参拝者同士の間隔がゆったりと空いていることもあってか、ほとんど私語がなく、おのずと厳肅な雰囲気醸し出されていて、重要な神事として、これはこれでまたとない機会なのかもしれない、とも思えた。

川面を吹き抜ける冷たい風が頬を突く。

祭員と瀬織津姫の一行が、しずしずと近づいてきた。

一昨年までは瀬織津姫行事に合わせて、先導車が八雲琴の音源を流していたが、今回も近隣住民に配慮して音を消しての行列となっていた。松明の明かりと祭員の浅沓や瀬織津姫の下駄の音が、行列の動きを知らせている。一行が橋の手前に差し掛かると足音が止まり、大麻後取が前に出て三差路中央で修祓を行なった。

京子はその様子を少し離れたところから拝し、修祓が終わるとあらためてライトアップされたブルーの綾部大橋に目をやった。橋上には、仮設ボールの大きな十曜の神旗

がはためいている。

人型流しの斎場となる綾部大橋は、和知川（由良川）に架かる現役の道路橋で、昭和初期の風景を今に伝える貴重なものである。一スパン約三十メートルのボウストリングトラスを七つ連続して架け渡してあり、平成十七年に国の登録有形文化財に指定されている。

ボウストリングトラスとは、七つのトラス（骨組み）の上弦と下弦がそれぞれ弓（ボウ）と弦（ストリング）のような形状となっているもので、ドイツのハーコート社が開発したプレハブ橋。日本でも明治から昭和初期にかけて全国各地で多く架設されたが、今では現存するものが少なくなった。

以前は人型流しのための張り出しステージが仮設され、木槌で人型の壺を割りながら人型・型代を流し清めていた。壺を割る音も神事の荘厳さを引き立て、綾部の冬の風物詩となっていた。

しかし時代の流れの中、神事とはいえ、環境問題や文化財登録の関係などから、仮設ステージの設置や壺割りが規制され、現在の橋の欄干からの人型流しへと移行していったのである。

橋の手前での修祓が終わり、祭員と瀬織津姫がゆっくりと橋上へ進んでいく。祭員が橋の上の定位置に並び、続いて人型・型代が入った壺を抱えた瀬織津姫がその後方に整列した。程なく、斎主の先達で神言奏上が始まり、集まった参拝者と共に松太郎と京子も手袋を外して手を合わせた。

「天津神は天の磐戸を推披きて、天の八重雲をいづの千別きに千別きて…」

神言の中ほどから、祭員が壺の中の人型を撒き始めた。用紙が風に舞いながら、川面へ散っていく。まるで雪が舞うように幻想的な景色である。

京子は人型を受けてくれた友人や知人の顔を思い浮かべ、また自分に人型を託した支部の信徒に思いを寄せ、さらに夫・剛や大地ら子供たち、そして孫の蒼汰朗など家族のことを念じながら、みんなの幸せと世界の平安を祈りつつ、一心に神言を奏上した。父・松太郎も張りのある声で神言を奏けていた。

翌朝の立春は、時折青空がのぞく穏やかな日和となった。京子は仮眠を取った後、久しぶりの実家で、両親と節分大祭の余韻を味わっていた。

「いい祭典だったわね」

京子が松太郎に声を掛けた。

「そうだったな」

松太郎が頷いた。
うなず

「良かったね」

母・ともは同行しなかったが、京子の様子から、二人が祭典に無事参拝できたことを自分のことのように喜んでくれた。

「でも、参拝者は少なかつたんだろう？」

「しょうがないよね、これだけコロナのオミクロン株が広がって、まん延防止等重点措置がたくさんの自治体に出されたんだから、信者さんたちも自粛せざるを得ないよ。私だって、参拝しようかだいぶ悩んだもの」

「そうだろうね。剛さんも心配したんじゃないかい？」

「まあね。でも、最後は気持ちよく送り出してくれたのよ」

「そうかい、優しいね」

「はい。それに、何人かの信者さんからも人型をお預かりしていたし。まあ、久しぶりの里帰りっていうこともあったからだけだね」

「まあ、無事にお参りできて良かったね」

「ありがたいことでした」

京子は軽く頭を下げ、ともが出してくれたお茶をすすった。

「お父さん、今年の節分大祭は、とても静かな祭典だったわよね」

「コロナの影響で、去年、今年と、これまでとは違った節分大祭になったなあ」

例年の祭典時、特に献饌けんせんの時間は、神饌物しんせんものの見事さから、参拝者席から声が上がる
ことが常であった。特に、三方からはみ出んばかりの鏡餅や立派な鯛たい、巨大な桜島大
根が祭員の手で運ばれてくると、歓声に近い声で殿内がざわつくこともあった。

「ねえ、お父さん、今年のお餅も桜島大根も見事だったけど、参拝者席は静かだった
わよね」

「そうだな、去年も今年も、張り詰めた緊張感の中での献饌けんせんという感じで、とても良かつ
たな」

「そうそう、そんな雰囲気だった」

「献饌けんせんの神饌物しんせんものの中では、鏡餅が一番重いらしい。確か一台で十キロを超えているっ
て聞いたな」

「そんなに重たいの、ビックリ！　じゃあ、祭員の人たちは大変だね」

「そう、献饌けんせんの時は真剣勝負だつて言っていたな。ところで京子はその鏡餅いんぎもちの謂れを知っているかい？」

「いえ、知らないけど」

「そうか、知らなかったか。あの鏡餅には、大本の開教以来の伝統が受け継がれているんだ」

「えっ、そうなの」

京子が興味を示した。

「大本の鏡餅は一般の鏡餅とは形が違っているのは知っているよな」

「大小じゃなくて、上と下のお餅の大きさが同じだったわよね」

「そう、“天地合わせの鏡餅”だ。で、節分の鏡餅の餅米は、二段で五升しやう六合七ごうしち勺しやくの量を使っているんだ」

「なるほど、五・六・七で“みろく”ってことね」

「大本の開教後、節分大祭でご神前にお供えされた鏡餅は、代々次の年に受け継がれているんだよ」

「どうやって？」

「節分大祭が終わって、立春の明け方……つまり今朝だけ……鏡餅もご神前から撤饌されて、すぐに神饌室でさいころ状に細かく刻むそうだ。そして長生殿の神饌室で一年間大切に保存されるんだよ」

「なるほど」

「で、翌年の節分が近づくと、さいころ状の餅をさらに細かく砕き粉状にして、神饌餅つきの日に、大本の神饌田で収穫した五升六合七勺の餅米に混ぜ合わせて蒸し上げられるんだ。そうやって、あの大きな天地合わせの五六七の鏡餅ができるんだな」

「そんな伝統があつたのね。すてきなことね」

「そうそう、このお下がりの小餅にも、去年の鏡餅がつき入れられているんだよ」

松太郎がテーブルの上に置いていた節分のお下がりの小餅の袋を手にして言った。

「今年、大本は開教百三十年だったわね。その間、伝統が受け継がれてきたということね。素晴らしいことだわ」

京子は感心するように何度も頷いた。

「それに大祭の神饌物は、毎年地方機関や信者さんからもたくさん献納されているん

だな」

松太郎がしみじみとした口調で言った。

「そうなのね」

「鯛や鯉、いろいろな野菜や果物が梅松苑に届くそうだね。あの大きな桜島大根は、鹿児島分苑から届くようだけど、毎年桜島まで買い付けに行つて送つてくださるそうだね」

「以前に『みろくのよ』誌で、写真で紹介されていたのを覚えてるわ」

「そうそう、レンコンも紹介されていたな。あれも岐阜から届けられているそうだけど、通常の販売商品と違って、レンコンの芽を折らないように丁寧に掘つてもらわないといけないから、熟練の技が要るそうだよ。何でも最低五年以上の経験がないとうまく掘れないんだって」

「見えないところに、いろんな方々の苦勞や力添えがあるんだね」

「あのレンコンの盛り付けも見事なものだと、いつも感心しているんだ」

「そうよね。私、本部の神饌物は、ご神前にお供えされた時の姿がとってもきれいだと思うのよね」

「そう、そこが大切なところなんだ。そもそも神饌物は多米津物といつて…」

松太郎は京子を前に、話に熱が入ってきた。

多米津物と感謝の心

「あら、始まったね」

ともが話を遮るさえぎるように言った。松太郎は、神さまや大本の話になると、調子が上がって来る癖がある。

「いいのかい、長くなるよ」

ともが京子に問い掛けた。

「うん、いいの。私も若い時は、また始まった……って敬遠していたけど、年のせいかなあ、ちよつと神さま事に興味が湧いてきたの。それに大地が芳かおるさんと結婚して、すっかり大本信徒になつちやつたから、私もすっかりしなないといけなかつて思うようになったのよね」

「おや、大地のおかげだね。長野だけに『牛に引かれて善光寺参り』ってどこかね」

「まあね」

「おいおい、横やりを入れないでくれよ」

松太郎が不機嫌そうに言った。

「はい、はい。すみません」

ともは苦笑いしながら台所へ入った。

「で、お父さん、神饌物のことだけど、ためつもの　っていう言葉は、何となく頭に残っているけど、どういう意味なの？」

京子が再び訊いた。

「ためつもの　は大本では、多い米、大津の津と物と書いて、多米津物　だけど、辞書では、味物　と書いて、ためつもの　とも書いてあるな。味の良い食べ物とか、うまい物という意味があるんだ。大本では神饌物の呼び名のひとつとして使っているな」

「ということは、他にも呼び方があるの？」

「うまい…というのは美味と書くだろう。それに物をつけて、美味物　で、うまいもの　と言う場合もある」

「どういうふうに使っているの？」

「神饌物の表現は、祭典の規模によって使い分けるようになっていくそうだよ。例えば、簡素な祭典だと、美味物。自宅の月次祭だと、種々の多米津物。　だけど、分所や支部の月次祭になると、ちよつと長くなって、御饌御酒を始め海川山野の種々の多米津物。　となるんだ。本苑クラスの月次祭となるとだいぶ長くなって…」

と言つて松太郎は本棚から『大本祭式』の本を取り出し、ページをめくつた。

「間違えたらいけないからな…、あつた、これだ」

と言つて、「本苑、分苑、別院月次祭祀詞」の中の神饌物の表記部分を指さして読上げた。

「御饌御酒をはじめ大魚小魚奥津藻菜辺津藻菜甘菜辛菜種々の果実御水堅塩に至るまで…」と長くなるだろう」

「こんなに違うんだね」

「そうだよ。そして、次の大祭祀詞になるともっと長くなるんだが…、ほらここ」

松太郎は次の春秋大祭の祝詞文中を指差して、同じように読み上げた。

「いいかい…、御饌を高坪に盛り高成し、御酒は甕戸高知り甕腹満て並べ餅の鏡は八十比良加に積み重ね海川の物は鰯の広物鰯の狭物奥津藻菜辺津藻菜山野の物は甘菜辛菜種々の果実御水堅塩に…」と、こんなふうになるんだよ」

「お父さん、よくスラスラと読めるね」

京子は感心して言つた。

「若いころには、祭式講習会で繰り返し練習したことがあったからなあ、今だったらとても読めないかもな」

松太郎は笑いながら言った。

「昔の本部での祭式講習会は、厳しかったからな。膝進膝退しっしんしったいで、みろく殿の畳の周囲を回らされたりもしたもんだ」

「えっ、あのみろく殿内を……。膝進膝退しっしんしったいって膝で進んだりする動きでしょ。畳一枚分でもきついのに、あの広いところを回るなんて、考えられない」

京子は呆れ顔あきで言った。

「まあ、時代だな。今の若者なら逃げ帰ってしまいかもな」

「たぶんね」

「まあ、そんなことで、祭典の祝詞もよく練習したものだ。若い時に覚えたからこそ、今も間違えずに読めるんだろうな」

「そうなんだ。たいしたものね」

「おや、京子が褒めてくれるなんて、珍しいことだな」

「あら、そうかしら」

京子が少し照れながら言った。

「でもな、京子。これが神饌物の順番を覚えるのにいいんだよ。というのは、お供えの順番が書いてあるからなんだ」

「あ、そういうことなのね」

「それじゃあ、説明しようか？」

松太郎が目を輝かして言った。すると京子は、んゝ難しそうだしな……と言って、悩むふりをした。

「京子、これを知っていたら、大地に自慢できるぞ」

「そうね、じゃあ聞かせて」

「よしよし」

松太郎は嬉しそうに言った。

「まず、御饌を高坏に盛り高成し、御酒は甕戸高知り甕腹満て並べは、御饌御酒の表現、つまり、お米とお酒のことだな。高坏という器は、背の高い杯で、神さまや高貴な方へお出しするときに使うもの。実際には、三方と土器だから高坏は使わないけど。器に盛り高成し……っていうのは、高く盛るということ。最初にお米をお

供えし、続いて穀物をお供えすることになっているんだ。

その次がお酒。甕は大きな「かめ」のことで、「戸高知り」の戸は上のことで、かめの上の口のところまでいっぱいということ。同じように「腹満て」は、かめの膨らんだ腹のところにいっぱいということ。つまりどちらも、かめの中にいっぱいということだから実際には、お酒を入れる御神酒瓶子にたつぷりということ、たくさんのお米とお酒を並べてという意味だな」

「じゃあ、あの御神酒瓶子にいっぱい入れているの？」

「いやいや、満杯に入れるということじゃなくて、そういう気持ちでたくさんお供えするということで、実際には七、八分目くらいかな」

京子は納得したように頷いた。

「次が「餅の鏡は八十比良加に積み重ね」だけど、これはつまり鏡餅のこと。比良加というのは、辞書だとこんな漢字なんだけど……」

と言つて松太郎はメモ用紙に「平瓮」と書いた。

「これ（瓮）は「へ」と読むんだけど、さっきの「甕」と同じで酒や食べ物を入れる器のことで、平たい形のものということだな。そして「八十」は「たくさん」という

意味だから、たくさんの平たい器に積み重ねていうことだろうね。もっとも大本では、天地合わせ鏡……上と下のお餅の大きさが同じだけどね」

「そうだったわね。でもお父さん、どうして餅に鏡をつけて鏡餅って言うんだらうね」
「それも諸説あるようだけどね。今ではお餅はお供えだけど、古代は神さまの依代、つまりは神籬ひもろぎやご神体にしていたということなんだ。ほら、神社の御神体が鏡のことが多いだらう。天皇家の「三種の神器」の一つが八咫やの鏡で、それが宮中の神殿の御神体になっているわけだ。だから餅も鏡に似せて丸い形になっているっていうんだね」

「そうなんだ」

「次が魚類。『海川の物は鰭はたの広物鰭ひろものの狭物』は、海や川で捕れる魚は、海・川の順でお供えして、その上で『鰭はた』……これはヒレのことだけど……ヒレの広いのから狭い順でお供えするということになっているんだね」

「実際にたくさん種類の魚をお供えすることがあるの？」

「いや、だいたい鯛たいてとじゃこくらいをお供えすることが多いかな。その上で、『海腹川背うなばらかわせ』と覚えるんだけど、頭を上座……向かって右にして、海の魚はご神前側に腹を向け、川魚は背中を向けてお供えすることになっているんだよ」

「『海腹川背』……、そういう決まりがあつたんだね」

「そのあとの『奥津藻菜^{おくつもは}辺津藻菜^{へつもは}』は、『藻菜^{もは}』で、昆布やわかめ、海苔^{のり}などの海藻類のこと。津というのは海や川のこと、奥津^{おくつ}が沖の海。辺^へは岸辺ということ。だから海の沖の方から岸辺に向かって採れる順番に海藻類をお供えすることなんだね」
「そんな順番もあるんだね」

「そして野菜類になるんだけど、ここは祝詞の『山野^{やまぬ}の物は甘菜^{あまな}辛菜^{からな}』と若干違うんだけど、お供えの順番としては、短い祝詞文中の『甘菜^{あまな}・辛菜^{からな}・山^{やま}・野^ぬ』と覚えるんだ。まず食べて甘い野菜類、キャベツや白菜、ホウレンソウや小松菜、ニンジンやカブなどが代表的かな。そして辛味の野菜…ダイコンやピーマン、シヨウガなど。その次に山間^{やまあい}で採れるキノコ類、そのあとに甘菜^{あまな}辛菜^{からな}以外の野菜類…、たとえばキュウリやナス、ゴボウやイモ類、トマト等となるわけだ」

「それって、区別するのが難しいよね」

「まあそうだけど、覚えるしかないな。そして、『種々^{くさくさ}の果実^{このみ}』ということで、果物類になるんだね。最後が『御水堅塩^{みもひきたし}』で水と塩なんだけど、お供えの台数が少ないときは、お米、お酒、塩・水をまとめて一台にして一番目にお供えすることが多いけどね」

「うちでもそうだよな」

「そう、支部や家庭だと、ほぼ一台でお供えるなあ。とまあ、神饌物しんせんものはこういう順番でお供えしていくんだよ」

「なるほど、だから本部の祭典では、あれだけたくさんしんせんものの神饌物がきれいにお供えされているんだね」

「その上で、全体のバランスや色合いも考えて美しく盛り付けるんだ。聖師さまは、皇神すめかみに捧ぐるものは悉くことごと神より受けし御賜みたまものなり

と詠んでおられるけど、神さまにお供えるものは全て、神さまからの賜り物だとおっしゃっている。だから神さまにお供えるときは、…祖霊さまにお供えるとき、お召し上がりください、という思いでお供えるのとは違って…、これだけたくさんものを賜りましてありがとうございます」という「感謝の心」を、神饌物しんせんものの姿を通してお供えることがとても大切なんだ。だから「賜り物」と書いて「賜べ物」(食べ物)と読むのだろ」

「そういうことか。だからこそ、きれいにセンス良く盛り付けることが大切なね」京子は何度も頷うなずいた。

真心からの供え物

…賜^{たま}り物で、賜^{たま}べ物^{もの}”か。

京子は松太郎の説明に納得し、昨夜の節分大祭の献饌^{けんせん}の様子を思い返していた。

「そうだ、お父さん、節分大祭には相当立派な鯛^{たい}が供えされていたよね。献饌^{けんせん}の時に、三方からはみ出しそうでびっくりしちゃったわ」

「あゝ、あれは確か…、今は全部献納品らしいよ」

松太郎が答えた。

「えっ、そうなの」

京子は意外に思った。

「鯛^{たい}は何人かの方が送ってくださっているようだね。本部の人に聞いた話だけど、中には信者さんでない一般の方もあって、その方は梅松苑の月次祭にも毎月送ってくださっているんだって」

「へえ、信者さんでない方が、またどうして？」

京子は驚いた表情で言った。

「なんでも、ご祈願をお願いして、大本の神さまに大きなおかげを頂いたからと、と

でも感謝されているらしいけどね。でもずっと続けるということは、とても立派なことだと思うよ。信徒でもなかなかできないことだな」

「そうよね。以前お父さんが、病氣平癒のご祈願でも、困ったときをお願いだけしておかげを頂いても、あとは何もしない人もあるって言っていたよね」

京子が確かめるように言った。

「たいていの人はちゃんとされていると思うけど、中にはそんな人もあるようだね。人間同士だって、困り事があって誰かに助けをお願いして、それがうまくいったら、普通は御礼をするだろ。なのに、神さまに対して困ったときにご祈願をお願いして、それが解決しても、あとは知らんぷりというのは、どうかと思うなあ」

「そうよね。それに比べると、鯛を毎月献納されているその方のお気持ちは、とても尊いことだよね」

「それに、自分の名前が出ることは嫌がられるようで、誰か信者さんの知り合いの方だとは思うけど、私もどなたなのかは知らないんだ。もともと名前を聞いても分からないだろうけどね」

「まさに陰徳を積むということね」

「大本のみ教えの中に、神さまのためにご奉仕しようとする場合は人に分らないようにすべきで、例えば神社などの寄進札などで名前を出すということは、本当は、神さまのみにかなわないことなのだ、という内容のお示しがあるんだな」

松太郎は『道の栞』の中にある以下の聖師さまのお示しを思い出しながら、かみ砕いて京子に伝えた。

神のために尽くさんとするものは、かならず人に判^{わか}らぬようと祈るべし。寄進札を建てるなどは神の心になわぬやり方。

「寄進札というと、木札に、誰々さんがいくら寄付したとかいうことを書いて掲示してあるものね」

「そう、鳥居や灯籠などに刻んである場合もあるね。あれも風習や神社の対応としてはしょうがないのかもしれないけど、そういうものは本来のご奉仕の在り方ではないということなんだ。ましてや自分の名前を出して人に知ってほしいがためにするようない気持ちがあったら、それこそ神さまには届かないんじゃないかな」

「だから、真心まごころからの献金や献納けんなくが大切なのね」

京子がしきりに頷うなずいた。その様子を見ながら、松太郎は満足そうな表情でお茶をすった。

「あと献饌けんせんで、鯛たいに続いて別のお魚がお供えされていたように見えただけど、あれは……？」

「鯉こいだよ。海の物が今話した鯛たいで、川の物が鯉こい」

「あれって鯉こいだったのね。でもちよつと動いていたように見えただけど」

「そりやそうだ、生きているんだからな」

「えゝ、あれ、生きていたの？」

「そうだよ」

「なんだか、かわいそう」

「いや京子、そうじゃないんだ。大祭の時に大神さまのおそばに行けるのだから、鯉こいにとつてはとても光栄で幸せなことなんだよ」

「ホントに？ でもそんなこと、鯉こいに聞いてみないと分からないんじゃないの？」

京子が皮肉っぽく言った。

「まあ、そうかもしれんが、それも聖師さまのお示しにあるしな」

「そうなの」

「太古からお祝い事には、鯛や鯉がつきものだったみたいだ。

もともと鯉は沼でも池でも生きられるとても生命力の強い魚といわれているんだ。

それに中国の故事の中には、黄河上流にある「竜門」という激流を登り切った鯉が竜となって天に昇ったという「登竜門」の伝説があるしな。そんなことから日本では、子どもの健康と成長を願って、端午の節句に鯉のぼりを立てる風習が始まったという説があるんだ」

「『登竜門』って…、突破すれば出世につながる難しい関門っていう意味の言葉のこと？」

「そうそう」

「そっか、登竜門はそういう語源だったんだ。知らなかった」

「お、そうか。まあ、そんなことだ」

「あれって、どうやって土器かわらけにのせているの？」

京子が訊いた。

「鯉を神饌物として盛り付けるときは、まず鯉の目を隠すんだ。すると鯉は不思議とおとなしくなつて、動かなくなるんだよ」

「そうなの？」

「それを専用の台座に麻ひもでくくりつけてお供えするんだよ。一度見せてもらったけど、なかなか熟練技のようだった。それから…」

松太郎は『出口王仁三郎全集』（第五巻）にある以下のご教示の内容の一部を分かりやすく京子に伝えた。

昔から鯉は河の竜、鯨は海の竜、馬は陸の竜といい伝えていて、竜の修業中の一変化である。紙で目隠しをして生きたままをお供えした鯉は決して後で食うべきものではない。これは丁重にしてどこかへ放してやるべきである。死んでしばらく経ったのは、酢か梅酢かを飲ましてやれば大抵は生き返るものだ。藁包などに入れた時でも、注意して縦に下げて鼻を打たぬようにさえすれば、二十五時間は大丈夫生きているものだ。鯉の種類は数百種あつて、その中でも真鯉……いわゆる滝登りをしたりするの

はこれである……は鱗が三十三枚あって、現在わが国には滅多に見当たらない。大本の金竜海にもわずか一尾いるだけである。とにかく鯉は出世魚であるから、無暗に殺生して食膳に上すべきものではあるまい。

(現代仮名遣い表記)

「じゃあ、お供えした鯉は食べたりしないのね」

「そうだよ。鯉は生きている間に早めにお下げして、金竜海に放しているんだ」

「そうなの。じゃあ、金竜海の鯉は一度献饌されたもののね」

「まあ、全部ではないだろうけど、黒い鯉は献饌された鯉が多いのかな。綾部では一年に大祭が三回あるから、少なくとも年に三匹は金竜海に放されるわけだからね」

「それは知らなかったわ。じゃあ、“登竜門”をくぐった鯉ってことね。私、子供のころ、金竜海の橋の上からパンの耳を鯉にあげたことがあったけど、そんな立派な鯉だったのね」

京子が感慨深げに言った。

「ところでお父さん、その神饌物の鯉はどこから調達しているの？」

「調達しているというか、今は奈良県から届いているんだけど、実は鯉も信徒じゃなくって、一般の方からの献納なんだよ」

「えー、鯉もそうなの、すごいー!」

「ある信者さんのご友人が、鯉の養殖の仕事をしておられてね、その信者さんが以前、お供えの鯉を依頼されたんだって。そうしたら、その方は、神さまにお供えするんだったら、自分がご奉仕させていただきたい」と申し出られて、それから綾部での大祭に、自分の養殖場で毎回、お供えの鯉を準備されているということなんだ。で、大祭ごとに信者さんが地元から運んでくださるんだと。去年、本部の人に聞いたら、もう三十三数年続いているらしいね」

「そんなに長年続けておられるの、すごいことね」

「しかもだ、養殖業をされているその人は、お供え用の鯉が他の鯉と交じらないようにと、それ専用の水槽を用意して飼っておられるそうなんだよ。いやあ、たいしたことだよ」

「ホント、素晴らしいことね」

「大祭の神饌物では、他にもお米や野菜、果物などの献納もあるんだ。みんな“真心”

からの供え物だな、ありがたいことだ」

松太郎はかみしめるように言った。それに合わせ京子は何度も頷いた。うなず

「そんなことで、大祭の神饌物しんせんもの一つとってみても、たくさんの方のご奉仕のおかげで成り立っているわけで、本当に尊いことだと思うな」

「だよね。私、なんだか、とってもありがたい、嬉しいうれ気持ちになっちゃった」
京子は顔の前で手を合わせ、小さく頭を下げた。

絶大なご守護

帰省を兼ねて節分大祭に参拝していた娘の京子が帰り、梅木家は普段の生活に戻った。

この冬は例年になく雪が多く、節分後、綾部も何度か大雪に見舞われた。また、気温の変化が激しく、八十歳を過ぎた松太郎夫妻にとつても体にこたえる気候が続いた。それでも「一月往ぬる、二月逃げる、三月去る」と言われるように、令和四年もあつという間に三カ月がたち、四月も半ばを過ぎた。そんなある日、梅木家に大阪から旧知の友が訪ねて来た。

「ごめんください、こんにちはー」

玄関の方から声がした。

来客を妻のともが出迎え、リビングに案内してきた。

「梅木さん、ご無沙汰しています」

「お、本宮さん、いらつしやい。よく来てくれましたね」

松太郎が立ち上がって迎えた。

「八年ぶりにお邪魔しました」

「えー、もうそんな前になりますか？」

「そうですね、あの時は、京子さんとお孫さんの…確か、大地君でしたか…来ておられましたね」

「そうでしたかね。さあさあ、どうぞ」

「梅木さん、ご紹介します」

本宮敏夫は同伴した男性を紹介した。

「こちら、飯沢^{いらいざわ}さんです」

「はじめまして、飯沢^{あきら}彬と申します。よろしくお願いいたします」

「飯沢さんは、家庭菜園仲間です、昨年、大本に入信されたんですよ」

本宮が飯沢の肩に手をやりながら紹介した。

「それはおめでとうございます」

松太郎が笑顔で言った。

「ありがとうございます。お仲間に入れていただきました」

飯沢も笑顔で応えた。

「まあ、お座りください」

「梅木さん、その前にお参りさせていただいてもいいですか？」
本宮が訊いた。

「はい、どうぞ」

「あつ、これつまらないものですが、どうぞ」

本宮がバッグから手土産を取り出し、松太郎に差し出した。

「そんな氣を使わなくても……」

「いえ、たまたま買ってきたもので、申し訳ない」

松太郎は礼を言つて受け取り、ともに手渡した。

「本宮さん、ありがとうございます。じゃあ、お供えさせていただきますね」
そう言つてともが二人を案内してご神前へ進んだ。

「ありがとうございました。ここのご神前は、いつもきれいなさっていますね」
礼拝を終えて本宮と飯沢がリビングに戻ってきた。

「そうですね、まあ、お掃除する時間は、たっぷりありますからね。さあ、こちらへ」
松太郎が言うのと、ともがお茶とお菓子を運んで来た。

「奥さん、もうおかまいなく」

「今日は例祭でしたか？」

松太郎が訊いた。

「そうなんです。うちの毎年慰霊祭と飯沢さんの復祭をお願いしたんです」

「そうでしたか、飯沢さん、おめでとうございます。じゃあ、ご神体も……」

「いえ、神さまの奉斎は、わが家の準備の都合で、もう少し後になりそうなんです」

飯沢が答えた。

「ご家庭がありますから、何かと調整しないといけないことがあつて、時期を見て奉斎されるんです。でね、いろんな話の中で、霊山霊地のことを話していたら、もうすぐ弥仙山祭典があるという話題になつて、だったら近くまで行つてみては……、ということになつたんです。それで、例祭の後に、お山の姿を拝んできたわけですよ」

「そうでしたか、今日は良いお天気だからよく見えたでしょう」

松太郎が飯沢に訊いた。

「はい、丹波富士といわれるだけあつて、きれいな姿が拝めました」

「弥仙山を前にしていたら、梅木さんのお宅が近いことを思い出して来てしまった、というわけです。すみません、突然で」

本宮が軽く頭を下げた。

「それは光栄だ、よく来てくださった」

松太郎も頭を下げた。

「それでね梅木さん、以前、真冬の弥仙山に登った話をされていたじゃないですか」

「あー、あのこと」

「もう一度、聞かせてもらっていいですか？ 飯沢さん、面白い話なんだよ」

「そうなんですか、ぜひ聞かせてください」

飯沢が身を乗り出した。

「そうですか、分かりました」

松太郎は少し間を置いてから、ゆつくりと話し始めた。

「私がまだ三十歳そこそこの時でしたから、もう半世紀も前の話になるのかなー、とても不思議な体験でした。弥仙山には若い時から、何度も登っていました。四月二十八日の祭典の時はもちろんですが、夏や秋にも何度か登ったことがあります。その頃、写真の趣味があつて、ある日思いついたんです。そうだ、雪の金峰山神社を撮影しよう…、とね」

「それがきつかけですか」

「そうなんですよ。でね、その年の年末年始はあまり雪がなくて、雪が降ったら登ろうと思っていました。そしたらちょうど仕事が休みの日の前日に待望の雪が降ったので、翌日、カメラと三脚を担いで、弥仙山みせんざんに向かったんですね。一月下旬、節分前でしたね」

「お一人で？」

本宮が訊きいた。

「はい、一人です。麓ではたいした雪ではなかったのですが、登り口にある水分神社みくまりを過ぎて、石の鳥居をくぐり、山道を登りかけると、だんだんと積雪が多くなってきました」

「昔からの登山道ですね」

「そう、今は途中まで別の道がありますが、当時は一本道でした。いつもとは、まったく景色が違ってしまってますね。しばらく進むと、もう一面真っ白。で、進むにつれて、どこが道なのか分からなくなってしまうたんですよ。どっちへ行ったらいいんだ」って不安な気持ちになった時、ふと目の前に、小さい動物の足跡が上に向かって続いていったんですよ。私は「ええい、ままよ」という気持ちで、その足跡についていくこと

にしたんです。そして、しばらく登っていくと、見慣れた長い石段があつて、[〃]中の宮に着くことができました」

「中の宮というのは、^{おなり}於成神社、^{ひこほでみのみこと}彦火々出見命をお祭りしている神社でね」

本宮が飯沢に説明した。

「開祖さまがおこもりになつたというお社ですか？」

飯沢が尋ねた。

「そうそう」

「飯沢さん、よく勉強しているね。で、私はお社の前でしばらく撮影した後、頂上を目指すことにしました。するとその足跡は、社の左手からさらに上へ向かつて続いていました。私はまたその足跡に従つて登つていきました。途中何度か方向が分からなくなつたり、雪が膝までの深さの所もあつたりしましたが、とにかく足跡に従つて登つていきました」

「不安じゃなかつたですか？」

「それが若かつたからかな、大丈夫だ！　という気持ちの方が強かつたですね。それで、[〃]ここまで来ればもう頂上は近い[〃]、と見覚えのある所までたどり着いたら、足跡はピタッと消えていました。まるでそこから空へ飛んで行つたみたいにな……」

「へえ、スゴイ！」

飯沢が声を上げた。

「金峰山神社に着いたら、自分の足跡でせつかくの社殿前の雪景色が台無しになってはいけないので、まず朱塗りの鳥居の手前から撮影しました。そうすると柔らかな陽も差して明るくなり、青空も見えてきて、良い写真を撮ることができました」

「それが、ご神前の部屋に飾ってあった写真ですね」

飯沢が尋ねた。

「はい、そうです」

「あの写真に、そんな裏話があったのですね」

「本当に不思議なことでした。でも撮影が終わるころ、風が強くなり、吹雪のようになってきました。で、感謝のお礼拝をして、早々に下山しました。

後日、綾部の先輩にこのことを話したら、二人で行くなんて無茶だ。へたをすると遭難してしまうぞ」と脅かされましたが、あながち冗談ではないと思えました」

松太郎はしみじみと語った。

「すごいお話ですね」

飯沢が感激した様子で言った。

「私は、あの足跡は神さまのお導きであつたと確信しています。きっと少しの間だけ撮影をお許しいただいたんでしようね」

「そうですよね、お空のお宮…金峰山神社のご祭神の木花咲耶姫命さまの不思議なお導きですね」

「はい、その通りです」

「そういえば、木花咲耶姫命さまの眷族は、猫でしたよね」
このはなさくやひめのみこと

本宮が訊いた。

「そうです、金峰山神社のお宮の中には、猫の置物もありますからね」
きんぶせん

「じゃあ、その足跡は眷族の猫だったのでしょうか？」
けんぞく

飯沢が訊いた。

「さあ、どうでしょう。アッ、それでね、この話には続編があつて、この不思議な体験をしたのは私だけじゃなかったんですよ」

「えっ、そうなんですか」

「昭和十年の第二次大本事件後、聖師さまの『綾部に来るように』というお言葉で、

四国から本部奉仕に来られた大先輩夫婦がありましてね。そのお二人が私とまったく同じ体験をされていることを後で知ったんですよ。しかもご主人は、その時すでに還暦を過ぎておられたというから驚きました」

「ホントですか？」

「はい。私より先に体験されていて、しかも私の時よりも状況は悪かったようです。で、その先輩の話を娘さんから伺って、私も神さまの絶大なご守護をあらためて確信したわけです」

「なんとスゴイご神徳談ですね」

本宮と飯沢は、感心しながら何度も頷いた。

出修の神事

「ますます行つてみたくなりました」

飯沢彬いづざわ あきらが言った。

「ええ、ぜひ今月、弥仙山祭典みせんざんの日に参拝してください」

松太郎が勧めた。

「はい、二十八日ですね。何とか仕事の都合をつけてお参りしたいと思いますが…」

「参拜できるようお願いしていたら、きつとかなうんじゃないの」
本宮敏夫もとみや としおが自信を持って言った。

「そうですね。神さまのお許しがないと登れませんしね」

「飯沢さんなら大丈夫ですよ」

会って間もないが、松太郎が飯沢の人柄に感じ太鼓判を押した。

「ありがとうございます。あの、弥仙山みせんざんも確か出修しゅつしゅうの神事の舞台としての大本ゆかりの霊山ということですよね」

「そうです。明治三十四年の『弥仙山岩戸みせんざんごもり』と、明治三十六年の『弥仙山岩戸開き』

の二回ですね」

「そのことは大道場修行の講座で聞かせていただいたのですが、私自身、そもそもこの「出修」という言葉自体が、その時初めて聞いた単語でしたし、一般の辞書にもないので、もう一つピンとこなかったんです」

飯沢が申し訳なさそうに言った。

「確かに一般的ではないし、大本独自の祭儀用語ですから無理もないですよね」

松太郎が答えた。

「梅木さん、もしよければ、飯沢さんに分かりやすく説明していただけませんか？」

本宮が松太郎に頼んだ。

「そうですね、私の個人的な解釈でよければお話ししましょうか」

「はい、お願いします」

飯沢も嬉しそうに頼んだ。

松太郎はお茶を一口すすってから話し始めた。

「まず、出修という単語ですが、「出修」の「出」は、「お出しする」の「出」だと思えます。太古、この宇宙や地球、天と地を創造された元の親神さまは、わけあって

この世から一旦姿を隠されました。そしてその親神さまと共に、多くの正しい神さまも散り散りバラバラと落ち延びておられた。その親神さまともろもろの神さまを“再び表にお出する”ということが、“出修”の“出”です。

“修”は、修行の修で、“修す”とか“修する”とか読んで、学問などを修め学ぶ、あるいは仏法や徳行：道徳にかなった“善い行い”をするということです。

ですから、“神さまを世にお出する”という“善い行いをする”、…“神さまを世にお出する行いをする”ということが“出修”の言葉の意味です。それと合わせて、神さまを世にお出することにつながる行為も、出修に含まれていると考えていいのかと思います。

“善い行い”と簡潔に言ってしまうと、ちよつと軽い感じがしますが、“神さまが願われた善い行為”ということですね。つまりは“出修”自体が重要な神さま事、ご用ですから『出修の神事』と呼んでいるわけです」

「そういう大本独自の用語なのですね」

「はい、出修は大本独自のものですし、この出修があつてこそ、大本のみ教えが確立されてきたと言っても過言ではないんですよ。一連の出修を通して、大本の神観や

歴史観、経綸のこと、それから聖地の尊厳や教主観、何よりも大本の根本的な教義である大本出現の意義が明らかにされて、大本の深い教えの確立につながってきたんですね」

「なるほど、大本の教義との深いつながりというか、影響があつたということなのですね。少し分かつてきた感じがします」

「そうですか、それは良かった」

松太郎は嬉しそ^{うれ}うに頷^{うなず}いた。

「それから、出修^{しゅつしゅう}にはもう一つ、**型** という考え方があります。これも大本独自の思想ですね」

「型の大本ということですね。講座で伺いました」

「飯沢さん、そもそも神さまを世に出すという行為そのものは、目に見えないものでしょ」

松太郎が問い掛けた。

「そうですよね。私も最初にそのことを考えたんです。出修^{しゅつしゅう}の神事と言っても、目に

見えない、形として分らないことですから、普通の人間なら、何をしているか理解できないわけです。分かるのは開祖さまや聖師さまだけですよね。

ただ、お筆先に書かれた神さまのご指示通りに、荒れた夜の海に小舟を出して島に渡る。弥仙山^{みせんざん}という山に登って、お参りしてくる。指示された場所まで水をくみに行く。遠距離を徒歩で進み、ともっている火を頂いてくる…、というふうに確かに現界的に肉体を使って事をなすわけですからね」

飯沢が確認するように言った。

「そうなんです。でも、それがまさに型であり、神さまの存在を信じ、神さまのおっしゃることに盲従してこそであって、そのことが信者の喜びともなるんです。そして、その行いを通して、神さまの望まれる目的が達成され、いろいろなことが現実的な形となつて現れてくるからすごいんですね。聖地の造営などはまさにそういうことです」

「確かに。聖地の造営は、人間が計画して行ったことじゃないですね」

本宮も松太郎の言葉に反応した。

「どういうことですか？」

飯沢が二人に訊いた。

「飯沢さん、大本には神さまを拜むところがたくさんあるでしょ。両聖地や東京本部とか、飯沢さんだったら、所属する大阪本苑にも頻繁に参拝できるし、その気になれば、全国の霊地・霊跡、霊山にでも参拝することができるわけです。それに今日は、わが家でもお参りしていただきましたね」

「はい」

「普通の神社の場合だったら、創建のきっかけは、人間がそこに何々という神さまを祭ろう、亡くなったあの偉人を神としてまつろう、荒ぶる怨霊を鎮めるためにまつろう……というような、人々の強い意志であり、それが形となって、神社を建てるという行為になると思います」

「そうですね」

「でも、大本の場合はそうじゃありません。今、梅松苑でも神さまを拜む場所はいくつもありますね」

「はい、長生殿をはじめ、みろく殿や緑寿館など、たくさんありますね」

「そう、つまり神さまを拜む神殿はたくさんある。宗教団体だから、それは当たり前

だと思われるでしょうが、最初からそうだったわけでは、もちろんありません。大本は今年、開教から百三十年がたちましたが、正式な神殿が建てられたのは、開教の年から、何と十七年も後のことなのです。

もちろん、その間には、今の金明水きんめいすいの井戸がある辺りにあった大島景僕けいぼくさんという方の個人宅を購入して竜門館りゅうもんかんと命名し、その二階の八畳間にお宮を設しつらえてお筆先をご神体として、神さまをほそぼそとお祭りされていました。当時、そのご神前を「大広前」と呼んではいましたが、正式な神殿ではなかったわけです。実は神さまはそれまでにもお筆先で神殿造営のことを伝えておられたんですよ」

そう言いながら、以下のお筆先の内容を伝えた。

「世の立替えを致して、お宮を建てて貰もらうて、お宮に住居すまいを致すのを待兼山まちかねやまのほととぎす、姿隠かげして蔭かげからの守護致した御蔭おんかげに依よりて、表面おもてで太古もとの御用、皆さしてお貰もらい申す世になりましたのは、永き苦勞の固まりで、金銀積んでは出来できん神業ことざぞよ」

（明治三十四年旧十二月三日・『おほもとしんゆ』第七卷）

「なるほど、神さまがおっしゃるお宮というのは、神さまをお祭りするための神殿と

いうことで、お金を積んでもできないご用ということなのです」

飯沢が確認した。

「そうこうしていると、明治四十一年でしたか、神さまはお筆先で、早くお宮…神殿を建てるように」と催促されたんですよ」

松太郎は、国祖が発した以下の啓示を分かりやすく飯沢に説明した。

「元の活神が杳島へ落ちておりたなれど、何かの時節が参りてきたから、明治四十一年の時節の夜に弥仙山まであがりておるから、お飯屋では何かの便利がわるいから、雑のお宮でよいから、早くしてもらいたい」

（『大本七十年史』）

「…杳島開きが明治三十三年でしたから、それから八年も後のことなんです。もちろん国祖の三千年のご退隠からすると短いかもしれないけど、人間心で考えると、随分とタイミングというか、時節を待つておられたんだろうなあ…と思いますね」

松太郎がしみじみと言った。

「なんだかスゴイお話ですね。ということは、梅松苑に最初の神殿ができるまで、元の活神さまは、まだ目的地に居場所がないのに杳島を出られて途中で足止めされてい

たということですね」

「そういうことすなあ。人間に例えると…沓島^{めしま}を明治四十一年の節分の夜に出発され、弥仙山^{みせんざん}で途中下車して、しばらく寝泊まりされていた。それも、明治三十六年に岩戸開きの神事が行われていたからこそ、国祖の神さまが宿泊される環境が整っていた。でもあくまでも仮の宿で便利が悪いので、早く目的地に、自分にふさわしい館を準備してほしい…ということですよ」

「なるほど、よく分かりました。弥仙山^{みせんざん}はその仮の宿でもあったゆかりの深い霊山ということですね」

「そうです。しかも、岩戸開きの時には、開祖さま、聖師さま、二代さま、そして生後間もない三代さまの四人…つまり四魂^{しこん}そろって参拝されています。その上、頂上にあるお空の宮と呼ばれていた金峰山^{きんぷせん}神社は、三代さまにゆかり深い木花咲耶姫^{このはなさくやひめの}命^{みこと}がさまがご祭神ですからね」

「いや、いろいろ神秘的ですね。それで、神さまのお言葉を受けて神殿造営が始まったということですか？」

飯沢^きが訊いた。

「そうなんです。でも実はその頃、大本の中は、火が消えたように寂しくなっていたんですよ」

「えっ、どういうことですか？」

飯沢は不思議に思った。

（続く）